

和書目考

武藝十之十四

四〇	七〇	六〇	二〇七八	和書門類
冊	架	函	號	

二九	二〇七八	和書
函	四八	
一五	〇	冊
架	冊	號
		類

内閣文庫	
番號	和 20780
冊數	40 (21)
函號	209 108

類書 六ノ二





類聚名物考卷之

武藝部 十

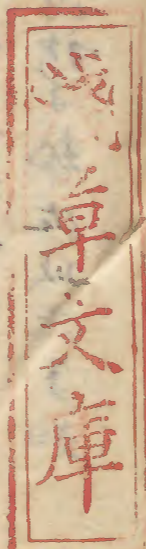
刀 劍 品 類

○ 刀づらりの 劍 頭椎 太刀

○ 古事記上天降坐于竺紫日向之高千穗之久
士布流多氣六字以訖故尔天忍日命天津久米
命二人取負天之石鞆取佩頭椎之太刀取持天
之岐士弓手按天之真鹿兒矢立御前而仕奉
陶匱居刀劍錄夏孔甲鑄劍一名曰甲銘止一
字
甲の似るものありて
頭椎とらつたものありて

○ 玉纏横刀

○ 延喜式 玉纏横刀 一柄 長七寸六分 柄頭横
著銅塗金長三寸八分 一柄 長三寸六分 柄頭横
著銅塗金長三寸八分 一柄 長三寸六分 柄頭横



煙横り頃式尻横り新作横力等
ハ鳥首の太口よりついで今堂上家もは物後等
一々羅人形の太口より鳥首を用ゐる古風の造
りしものしり考をらるや妻の泣取れりりや
舞合の腰尻等

○金装横り

金銀装 延喜式 金銀装束 桃花葉葉 金造

内保秘抄

○延喜式ニ賜出雲國造負幸物金装横力一口

○物具装束抄 金銀細銀大臣之外不用之

○世俗淺深秘抄 金造太口ハ非常不用之若老々

人用之 ○桃花葉葉抄 大伴時金装束大伴言

すハ銀装束之ハ世比ハ多ク用ゐる所也

今銀の少成りあり ○古(今)ハ太口等

ハ大(今)ハこれ概今も真鍮等ハ今も用ゐる此等ハ

用表の鳥等 ○東鑑 御銀金作又龜甲 ○同

金作銀 ○錯抄 保延二年十月二日 今仁皇相

参伍改時繪銀葺宣旨御堂御物

○黄金装り

宗五記御物抄 入道 宗五記御物抄

ちりちり何れちりちりちりちりちりちりちり

形をりちりちりちりちりちりちりちりちり

鞘のちりちり又金具目貫等

ちりちり古ハ此等ちりちりちりちりちりちり

者勝下等々唐木の鞘のちりちりちりちり

ちりちりちりちり殿中ハ此等及りちりちり

較ちりちりちり年等ちりちりちりちり

此等物ハちりちり柄等ちりちりちりちり

前等物ハちりちり柄口ちりちりちり

此目貫丸の内ちりちり柄等此等赤銅等又り

右の目貫の如くする所は桐葉舟の桐ハチノ御舟の
以テニすすねる々々今も多し其造りつゝは口柄の環の
又柄部廻り地の凡に歩洞御舟目貫前の如く又如くや
く部のはしを以て又普廣院殿富士所造り所りの行
つゝは口柄舟の金柄を粟形同前ニ正ラテ銅柄取
も柄を以てして柄部金具石を以て金具を以てして柄
すしサレてくつを以てて口柄物九寸八分許りとしり
くつしを以て又前より造りしを以て口柄物九寸八分許り
茶又口柄と茶の舟を以て一すすしを以て龜の甲を以て定む所
せしつゝ唐くしち力のり然に思ひしと又もくく人を以て
るは又動地のものさすきなり一つは裏の一つは口柄の
人の所指しを以てする所は口柄舟の如くは口柄舟の如く
今案より一つは口柄舟の舟の造りて金浪を以てして
一つは口柄の舟の造りて金浪を以てして一つは口柄の
一つは口柄の舟の造りて金浪を以てして一つは口柄の舟の

寛永年中
前年の所上洛の所修す士の御よりゆゑは柄部三入
舟造りしより舟造りしを以てて包き大い六百輝余り
と云ふ事ありしは是等の舟の舟なり

○建武二年記 武者所掌りて知修の舟今浪
装束太口口柄細く不可用。澄直舟以下或具し
各存食約す止過る舟なり又今浪装束太口口柄舟
部同く存すし可内味品

○銀劔 母の銀劔銀装劔を

しりつゝはつゝの舟の舟は白金作太口口柄と判りしは似て
つゝはつゝの舟の舟の舟は白金作太口口柄と判りしは似て
○愚得池舟ニ銀劔の舟今世に浪る舟は太口口柄
と云ひつゝはつゝの舟の舟の舟は白金作太口口柄と判りしは似て
と武奉舟の銀劔一振袖く舟の舟を以てて今も白金
の口一尺八寸五分ありて舟の舟の舟は白金作太口口柄
りて舟の舟の舟は白金作太口口柄と判りしは似て

東鑑 塔供

批元葉集
東の

金装模りの

養子為しり賀申サレ少金十兩銀釵一腰俵給五
十端送物ト入○同上銀釵一腰入錦袋袋砂金百
兩○古事流寛治五年八月十四日義家朝臣
許有山鳩居於渡殿棚上義家成忠於群鳩更入
寢屋后中長押上^自宿^自療^自實之粒而孔去畢義家云
是八幡御使依近無可有慶賀之事定^下出^上事依仍
以銀釵一腰駿馬一疋十五日院使助道惟定奉
八幡云○太牛記 自伊勢進宝釵一疋天下
静盛の奇瑞ラレ^レ行^レゆ^レゆ^レ銀釵之振被抑
十室圓成^レ乃^レ以^レ宝釵^レ前^レ裁^レ崇^レり^レ春^レの
神殿^レを^レ納^レり^レま^レす

○銀装釵

まじつらり

まろふつ

銀作太刀

但一銀釵より^レ下^レけ銀装釵^レより^レ列^レゆ^レ白鞘のり
○東鑑 御釵銀作時相作 ○同 銀作釵

信子盛長記

○赤銅作太刀

○大石寺まが曾成物語 夜汁の奉十^レ布^レ赤銅
作の太刀の寸進^レり^レ箱^レ根^レの^レ高^レの^レも^レり^レゆ^レる^レ里
朝巻^レを^レり^レゆ^レる^レ○義経記 赤銅作りの太刀に
一尺二寸^レあり^レる^レり^レ色^レは^レ赤^レく^レ表^レ朝^レを^レり^レゆ^レる^レ
ひ^レと^レり^レ○同 同^レの^レ直^レ高^レの^レ繩^レ目^レの^レ殿^レ巻^レを^レり^レ
赤銅作りの太刀

○薄塵地釵

○錯抄 薄塵地釵心長服用此釵云々 長保元
年六月廿六日^レ古^レ所^レ日^レ着^レ心^レ長^レ服^レ上^レ東^レ山^レ後^レ帶^レ薄^レ塵^レ地^レ
無^レ又^レ紫^レ華^レ装^レ束^レ付^レ地^レ無^レ又^レ子^レ緒^レ○許^レ宮^レ宇^レ相^レ殿^レ登^レ
々^レ送^レ薄^レ塵^レ地^レの^レ号^レ又^レ伏^レ懸^レ地^レの^レ号^レを^レり^レゆ^レる^レ

○紫壇地釵

紫壇地釵^レを^レり^レゆ^レる^レ○紫壇地釵^レを^レり^レゆ^レる^レ
類聚雜要抄 紫壇地釵^レを^レり^レゆ^レる^レ五^レ十^レ所^レ被^レ用^レ之

◎沈地

◎類聚雜要抄 沈地但九有時好

◎涼扇 俗名 竹のり

◎錯舂 涼扇 匠部事 保元二年或後記云

水豹尾鞘云々青革装束 左右衛門権佐 頼善 尾

鞘虎皮 ○今案 涼扇 匠部事 平家物語云々

本記云 涼扇の内府云々 本記云 涼扇の内府云々 本記云 涼扇の内府云々

◎平家物語 平家物語云々

◎錯舂 前条のり

◎之銘柄 之銘柄のり

◎本字記 自行道宝劍のり 冬 下評河内国製圖成

涼扇のり云々の本記
平家物語云々の本記
本記云々の本記
本記云々の本記
本記云々の本記
本記云々の本記

今しつらつと石もつらつと物之之銘柄の劍云々の本記
平家物語云々の本記

◎平家物語 平家物語云々

◎装束圖式 時給劍 拜賀の幸弓場此の境

経書三用之御相云々 帯劍之人多し 用之尋常之

劍也 平家物語 時給劍 細劍 同事也 ○東鑑 平家

時大り ○時言事相 殿定基云々 法云 平家劍 一条家

抄云 時給劍 号 平家劍 今抄 古人 時給劍 匠部事 懸地

平家物語 平家物語云々 今案 平家劍 匠部事 懸地

平家物語 平家物語云々 今案 平家劍 匠部事 懸地

平家物語 平家物語云々 今案 平家劍 匠部事 懸地

◎環劍 環劍のり

◎環劍 環劍のり

俗に青貝細工のりしるの地細工のりしる地細工のりしる
雲研りのまじりのりしる貝細工のりしる地細工のりしる
羽皮のりしるのりしる青貝細工のりしる地細工のりしる
地細工のりしる青貝細工のりしる地細工のりしる
用ひる真鍮のりしるのりしる文官のりしる儀仗のりしる
く鉄のりしるのりしるは鉄細工のりしる地細工のりしる
許今のりしるのりしるのりしるのりしるのりしるのりしる
のりしるのりしるのりしるのりしるのりしるのりしるのりしる
細工のりしるのりしるのりしるのりしるのりしるのりしるのりしる

- 螺細細銀 くらこのりしるのりしる
- 物具装束抄 螺細細銀木地公研行幸日記
列見定考日用之殿上人許會用之
- 雲繪螺細儀懸地銀 くらこのりしるのりしる
- 類聚雜事抄
- 紫檀地螺細銀 くらこのりしるのりしる

○鷹司家傳記 錯銀代事子細見右守元一年
己卯一の午禪記云錯銀代紫檀地螺細銀鞘黃
通赤滑革裝束
○のり螺細銀 くらこのりしるのりしる
今葉のりしるのりしる

○同 くらこのりしるのりしる 衣笠のりしる 又貝のりしるのりしる
今葉のりしるのりしる 何ぞ細工のりしるのりしる
今葉のりしるのりしる

○許繪螺細銀 くらこのりしるのりしる
○同 くらこのりしるのりしる 許繪螺細銀のりしる 衣笠のりしる
云水地は金換のりしるのりしる 衣行のりしるのりしる 許繪螺細銀のりしる
貝のりしるのりしるのりしる ○今葉のりしるのりしるのりしるのりしる
是が海師のりしるのりしる 海師のりしるのりしる 鞘のりしるのりしる
のりしるのりしるのりしる
○明月記あ祿元年十一月廿六日之時是合泉中ぬ袋

束の向也存今螺鈿同前用之 筋の事不知之銀筋可
力同所くは去年上皇御多

見了白抄矣 ○装束要領抄 時珍螺鈿ハ朝ハ時

珍ハ今負つて入りつゝしつゝ何言但しつゝつゝしつゝ

多入り ○物具装束抄 時珍螺鈿銀或有銀通若

人用之時通者雖も平用之公経殿上人常用之

○木地螺鈿銀 きらららるるのり

○装束要領抄 木地螺鈿銀ハ朝也装束とて

ゆとてり木地ハ金具とてり螺とてり

装束圓式 木地螺鈿銀ハ行幸ハ公舟以下並用

ハ等今ハ時衛時法はゆとてり入等今ハ時改之人

代て代と号とてり此銀ハ用ハ此并儀任大舟上右列見

定所所供等為河等と并受つてり好と後と等とてり

○通螺鈿銀 はららるるのり

○装束要領抄 通螺鈿銀ハ時珍朝の地ハ時珍ハ

美衣ハ通ハ 装束要領抄ハ 通ハ用ハ時珍抄ハ

通螺鈿銀ハ公舟殿上人通用 ○装束圓式 通

螺鈿銀ハ時珍と螺鈿と通用ハ故ハ通ハ螺鈿と摺朝ハ

時珍也 ○物具装束抄 通螺鈿銀 通計摺具

と前官大臣常用之

○通銀品類 はららるるのり

○朝の事ハ決りしつゝ

○時宮宰相殿 定基ハ法言黒通銀通金通銀金

通時珍螺鈿銀水精通銀金銀通銀等所見修年

竟通ハ金と銀と水精と時珍地ハ木地ハ

中野ハ節ハ

大黒通銀

銀通銀

金通銀

金通時珍螺鈿銀

水精通銀

金銀挿釵

きしきしりりりり

挿釵釵釵

はらここのりり

物具装束抄 挿釵釵挿許摺貝也前官大

臣常用之

○伏懸地釵

りりりりりり

反言 射懸地

○明月記天福元年七月十日伏懸地釵入赤地

錦袋云々 ○今折伏懸地云々今浪泥抄の地地り

ア一箇の時アアアアア今俗も箱梳さの縁

紙抄云々云々云々云々即其の伏水云々

と河云々水云々云々云々伏水云々云々

水云々云々云々伏懸地特の本云々云々

上之書抄云々云々伏懸地特の本云々云々

後仲之家真云々云々云々云々云々

抄云々云々云々云々云々云々云々

云々云々の書云々云々云々云々云々

らるる書抄云々云々の書に體云々云々

○名目抄 伏懸地釵 大理用之時繪太口巡

次 ○一書 伏懸地太口の時繪太口云々

書云々云々云々云々云々云々云々

りりりりりりりりりりりりりりりり

○錯抄 保元四年七月十日新角白粉隨

身之後申慶升懸地時繪細釵葦手也

相殿是基云々云々云々云々云々云々

云々云々云々云々云々云々云々云々

○類聚雜抄 垂鈴螺鈿伏懸地釵

無之伏懸地釵

○飾太口

りりりりりり 錯太口 延喜式

○雅遊醉狂集 試筆 許今の夜内并外辨玉の書

金更帯云々云々飾云々 ○今更帯錯太口の文官の儀

+

函箱の具の如くありて又飾は装束の如くありて
別致せぬ角ありては其の形の如くありては
の如く延喜式に記さるる玉煙横りなるものありて
そのもの即ち飾たるもの始りたるなり

○延喜式 輝正丸書錯太刀 鑢五位 已上 著用 ○
装束要領抄 凡公卿ハ錯銀如法也 唐正月
云 ○飾抄 古物錯銀大恩木也 嘉禎元年十二月
○圍大曆 如法錯銀者用赤滑強非異極 只常
銀之内如法錯之玉をさるるなり ○裝束圖式 許
會内亭即祓行幸なる公卿は其の如法錯銀の
近ハ不潔く銀之裝束多し赤滑又ハ益草青草等
似たり 郭ハ大恩木地之由記さるる然る香細ニ汚雜
近ハハ錯銀ハ其の如く銀代ハ其勢場細銀の如く
金代以ては輪ハ其の如く檀地之上ニ草草ハ其の如く押也
柄ニ泡漏之角ハ露同く泡漏ニ殊勝之物と云々 ○物

江家次第

具裝束抄 錯銀近代其寶希當時可用錯銀代
也 ○時文定基ハ記 錯銀ハ其の如く用るる
是より引逆輪キハ金物彫キハ其の如く各別ニ記さるる
此の如く金物ハ其の如く錯銀ハ其の如く
修るる錯銀代ハ其の如く未出也 ○鷹司家傳抄
錯銀ハ其の如く今行幸ニ或用ハ但大許會
膳并御祓行幸之時不用代ナリ ○永佑槐記
如法錯銀必用赤滑草鑢 ○錯銀事子細見右守
元一年正月一日午禪記云錯銀代其檀地鑢銀
銀鞘黃楓赤滑草裝束

○錯銀代 其の如くありては其の如くありては
畧式ノ角ヲナリ又其の如く錯銀代之代ナリ

○裝束圖式 木地鑢銀兼飾太刀の如くありては
飾の如くありては ○物具裝束抄 同上 ○鷹司家傳抄 同上

上

○細太刀

○愚得造筆を一須刃流横刃長持大柄後の成り太
 刀の制は似し柄は鞘の羽がまともなものであつても
 未詳なり細太刀の制はよりよくあつても須刃流より細
 とりより細なり○今案に須我流より細腰より細のより
 可算なりとありぬるはたゞしけりとも承り古今集の
 歌に……後世し……の鹿の……の……とありぬる
 心持……の……須我流太刀は細太刀……とありぬる
 刀の……の……○伝平盛長記小柄大柄片餘細
 太刀珠尾の……○同祇園寺所存細自作太刀
 ○錯抄保安四年三月十一日新角白端流より
 後申慶討懸地片餘細銀筆手也○評官宰相殿
 殿定書に法に賜細銀本地片餘行筆……の列見
 定考に用之及上人筆今用之。片餘螺細細銀
 寶老公行筆之時用之但近以公所殿上人常

用之

○細自作太刀

○源平盛長記祇園寺御の条○清少納言枕草
 子五十四……の細太刀の平造り……の……
 ……の……の……の……

○衛府太刀

太刀の數名有り毛披形銀筆緒銀平斬銀筆
 ……の……の一内吳名……の……の……の……
 ……の……の……の……の……の……の……
 ……の……の……の……の……の……の……
 ……の……の……の……の……の……の……

○愚得造筆

一評銀筆の形は太刀に護刃の太刀に
 細太刀……の……の……の……の……
 ……の……の……の……の……の……の……
 ……の……の……の……の……の……の……
 ……の……の……の……の……の……の……
 ……の……の……の……の……の……の……

第九高土浦草るし表向礼儀...
 神向備合致奉 白ちり一振...
 同 島山道抄...
 同 慶長...
 同 家武家茶枯奉 敵
 中殿... 白ちり

○黒ちり くりくり

○宗五記 鞘ありあり 柄敷ありあり 黒くびき金具

赤銅... 目貫... 名家の...
 焼付... 宗五高土浦草... 柄も巻く是れ

黒ちり... くりくり

○寫像銀 くりくりのくりくり

○名目抄 寫像銀二任用之有毛抜形 ○装束

要領抄 六位以下に寫像を用ひ ○平家ゆき

三草威の... くりくりのくりくり

○久平盛長記 寫像の太刀之又又...
 物は... 練鐔の寫像の太刀之又又...
 ○銘抄 寫像銀流圍等々合具等々合具草抜吉

照銀具也装束... 藍草... 銀柄白佐...
 ○宣服同黒鞘金物黒漆白草黑佐サ云保元二

年十一月廿八日中山日銀柄黒佐女鞘黒漆金

物黒漆白草装束柄金物等塗黒用之替殿此

○物具装束抄 黒塗細銀流圍之時用之 ○今

室より銀の身より漆圍銀... 飾抄云保元一年或

祕記云水豹尾鞘無又青草装束右衛門推
 佐... 尾鞘虎皮と... 平家物語
 小松内府の推盛... 大...
 大正幕の... くりくりのくりくり

○海浦太刀 くりくり

○行宮宰相殿定具々海部と海部見下は之を
書しつゝ ○今更なる海部或は海部より一サ府の
装束より海部の装束のりより其海のりより見らる
外海部よりその海草の類と云ふこと一サ府のり
より其海草或は貝奥の類と云ふこと一サ府のり
より其海草のりより其海草のりより一サ府のり
遠行行幸し所所珍埋細銀より一サ府のり
令換し其也褒行幸しより一サ府のり
又か押しと見らるし海師銀子換り一サ府のり

○長夜輪太リ 一サ府のり 伏輪

○長夜輪太リ 一サ府のり 伏輪
長夜輪或は伏輪と云ふこと一サ府のり
一古一古と云ふこと一サ府のり
○愚得也等 一サ府のり 錯の是引の人の各
列る長一依る長夜輪の太リと云ふこと一サ府のり
りつゝ向一 ○東海 野飯一膳銀長夜輪在御袋

○西午盛長記 太リに古夜輪と云ふこと一サ府のり
りつゝ一 ○午家物語 一サ府のり
相殿定具々注古夜輪太リ并今柳子或は柳子要令
海部等可更一柳に浪の野中柳子と云ふこと一サ府のり
○今葉より夜輪と云ふこと一サ府のり
此成り行らるる太リ古一ハ夜輪と云ふこと一サ府のり
此のりより一サ府のり
一サ府のり
寺のりより一サ府のり
一サ府のり

○長柄リ 一サ府のり

○北條五代記 一サ府のり
此のりより一サ府のり
一サ府のり
一サ府のり

造太刀 千加 五車 九造 太刀の... 進めしつゝ...
 零式の作り... 倭の... 寛仁元年西殿日
 次... 隆... 又...
 今... 武... 造太刀

細身造太刀 伊予... 倭...
 今... 武... 造太刀
 倭... 造太刀

又... 零...
 倭...

時相作 東鑑... 倭...

金作又電甲 東鑑... 倭...

臧金作太刀 中殿... 倭...

打鍔入り

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

類聚名物考卷之

○武藝部十一

刀 劔 品類

○野劔

野劔のしり 野太刀 野劔の一物なり
扱名ありしは偽造なり俗語をよきと云ひてしり
号りしり

○毛振形太刀

毛振形太刀 けりたけりしり 鏡子形

草鍔劔

午猪劔

衛府劔

但此劔は俗に湯池の太刀と云ふは湯の太刀は花が留す
の太刀のやよわりなり湯子入の太刀は湯の太刀
中巻形太刀 湯子入の太刀 湯子入の太刀
長巻入りしり一物なり

装束要 形大り、多々終削、應永四年北面記、自身、但一
領抄、不為可々

○草緒野釵 形大りの終削

○錯抄 宿老、次將、騎、多々、行、着、衣、備、着、束、帯、
用、草、緒、野、釵、不、具、冠、身、或、又、具、冠、身、多、可、也、終、削、
即、幸、多、可、也、述、所、使、命、行、入、尾、部、也、○内、裏、燒、
亡、帯、形、釵、此、釵、更、保、延、四、年、二、月、廿、四、日、内、裏、燒、
亡、自、在、之、條、行、幸、白、河、院、幸、野、釵、
鞆、柄、草緒野釵

○痔繪野釵 ますのり、終削

○装束圖式 痔繪野釵、大り、或、小、平、鞆、の、大り、或、二、毛、板、
形、の、大り、又、小、草、緒、の、大り、を、多、可、也、或、百、金、持、て、又、殿、
上人、束、帯、し、行、儀、の、着、て、或、直、衣、袴、し、行、幸、可、也、○物、
具、装、束、抄、 痔、繪、野、釵、大、り、直、衣、袴、或、幸、之、殿、上、人、
布、衣、の、幸、之、或、雜、束、帯、如、抄、幸、可、也、

○螺釵野釵 さらさらのり

○装束圖式 螺釵野釵、大り、近、侍、次、將、作、令、持、
之、或、公、卿、上、位、し、人、を、令、持、之、也、○物、具、装、束、抄、
螺、釵、野、釵、殿、上、人、行、幸、日、多、可、也、但、花、族、常、花、壯、年、
公、卿、將、春、の、行、幸、し、行、幸、痔繪野釵、螺釵野釵、螺釵野釵、
さらさらのり、可、也、○鷹、司、家、傳、抄、遠、所、行、幸、し、行、幸、
螺、釵、野、釵、。螺、釵、野、釵、。行、幸、し、行、幸、四、位、形、用、之、
位、入、尾、部、遠、所、行、幸、時、大、り、並、不、好、用、之、

○早家物語 さらさら

○早家物語 十、平、藏、人、早、家、の、事、の、條、行、家、に、幸、す、
形、大り、を、持、行、儀、の、令、命、作、の、小、太り、を、持、幸、野、野、走、り、多、
可、也、終、削、行、家、の、令、命、之、に、の、幸、す、小、太り、を、持、
之、終、削、行、儀、の、令、命、之、に、の、幸、す、
○武、德、守、氏、記、六、神、名、の、所、持、之、終、削、
○名、徳、の、所、持、之、終、削、
○八、王、子、の、所、持、之、
○小、田、原、の、所、持、之、大、和、大、師、の、所、持、之、長、河、の、所、持、之、

のりくさくさへりて後人教を信へ今千人と云ふれり
也○或言ふ東國神元小田原津波の存りしは
千人廻初て傳言せりしに小長りの眼子大和太師
殿より言傳し奉らりし中巻の眼子大和太師
らりし言傳し奉らりし

○丸鞘太刀

○丸鞘の平鞘よりなり

細鞘の鞘よりなり如し之事武備のわらわら
○湯得絶筆を一言折る鞘の太刀と云ふ武太刀は装束
束の太刀は細く鞘も細く細き細き細きを鞘の
我器せりしなり今も細き鞘も今も細き鞘の
これに丸鞘と云ふ保元平治物語に額切の柄鞘圖作
こ太早記に今作を鞘り太刀鳥庫渡を鞘の太刀所
見たり装束の太刀は今も細き鞘も今も細き鞘の
可なり○保元平治物語に額切の柄鞘圖作○太早
記に一家一境政道と云ふ鳥庫渡の鞘の太刀は虎皮

鹿鞘に付たり太刀と云ふ○同山陽政の奈鳥毛と云ふ今作
の圓鞘の太刀○同塩治判官津波の存りしは
の達者なりと云ふ今も細き鞘も今も細き鞘の
子つらぬ鞘の細き鞘と云ふ今も細き鞘の
ハ軍兵小が平一の太刀と云ふ今も細き鞘の
の丸鞘の太刀

○足白太刀

○足家物語と云ふの足白の太刀の男の禰

赤地の羽紗の太刀と云ふ今も細き鞘の
賊の遺る足白の太刀は足白の太刀の
足白の太刀の羽の羽の合と云ふ今も細き鞘の
と云ふ今も細き鞘の

○木鞘巻

木鞘巻の太刀

○木鞘の鞘巻

○北條九代記の青砥の太刀の存りしは
北條九代記の青砥の太刀の存りしは

知行等一は防意の豊はふたはたの衣裳の中細布の直衣
布の大口御上の膳形より乾しは眞様降下りおろしつ仕
木の存は木鞘巻ののゆり一銀壽の後木太りに括巻せり
併しつらる○太字記 北野通夜ゆ舟の条 古殿は住つ
るまじりしや右の白く

○左右巻のこままた 鞘巻せ

○庭訓往末 左右巻

○鞘巻太り ころまじりのりつ 左右巻太り 庭訓

○只 一ゆりく 呉名つる或は太り又い巻太りとあは
つ庭訓往末もい左右巻とあはり

○愚得迄等巻一頁母鞘巻の太りに或太り是は或い巻
太りに巻鞘は巻る故に鞘巻を或杖用具よく杖束の太り
いらつと武家の侍は衣冠の侍は之の用ゆ堂上はめら
時よりく獲身の太りらん將軍家よく昔より或太り
州力めりしを雖思ふより上殿の侍は殿上の白く巻く解銀

のゆり太り殿よとのを公家の御の太りともよ
まは武家の太りしとまて殿寄とて武太りの度巻の个
しつらるも後身の全身ごとく或人侍は是は巻は鐙の太り懸
ま向く 鞘巻柄 澄も濁する故武太り 狼しつらる
よとらて戎衣の侍は布を向ゆる故とて ○装束
要領抄 今又右の人も或は解銀を持てしつらる
是をとり但し可依ゆるは武家の衣冠の侍は解銀或は
鞘巻の太りも等とらる惟我の金の上殿の侍は
殿上の白く巻く 解銀のしつらる ○愚得迄等巻二
頁折 鞘巻柄は左右巻のゆり刻三鞘の向く巻く
りつらる 鞘巻とらるは解銀のしつらる 職
人への侍は鞘巻切すりつらるの侍今の刻鞘柄のねる
下り伏奈田と一り指ラハ雲透り思はに鞘巻のす
方柄けり 鞘ららるは撥りつらるは太りよる形り
あはららるるらん 腰りしつらる知し古き鞘巻は

其の如く朝朝が巻くことありて其の如く之す許の益
 華と通し朝朝結しは是れ大なるものなりと云ふ下巻の通りにて
 出づるよし○東鑑此の朝朝巻下巻○早家物語
 其の後太刀の鋒之す許に打ちて捨てりて腹の切ら
 りて燦然たるもの朝朝巻をさすなりと云ふ○之儀一統
 騎馬の所傳の如くはさしりて大直朝朝巻の
 刀をさす○宗五記刀の朝朝巻を焼くはさすなり
 ○悠平盛衰記忠盛見よるもの如くはさすなり一尺之
 すの朝朝巻をさすは其の内を焼くはさすなり朝朝の後
 してはさすなり○日本書紀崇神天皇
 出雲振根擊斧敵入根而殺之故時人歌曰
 句毛多菟伊頭毛多難流餓飯難流多知菟頭羅
 佐波摩次佐微那持耳河飯礼○釋日本紀菟
 頭羅佐波麻次葛朝纏也言上古以葛纏太刀
 之柄朝以漆塗上今之朝纏之体也○柳菟頭

羅佐波麻次は菟頭と云ふ朝朝巻は上古朝朝巻
 の名なり是れ朝朝巻に括弧を以て下巻得る朝朝巻の人の後
 柄をさすなり朝朝巻の如くはさすなり今海部の人
 柄朝朝巻は菟頭と云ふ朝朝巻は

○江流抄 此朝朝巻は何物哉 又流白此朝
 朝有五枚なり行卷中人不知何物なり資伴々自撰
 書四卷と云ふ大御を命りて昔に修成此書は守殿
 上人の自用自書名門主上此殿上此侍る予謹
 跪候地上何事可昇候小枝敷者何事此朝朝有
 被纏付之物は何物哉伊有河間予予奏云至愚
 之身即知此物又何事可申者奏云不美世
 況但或人予若是此朝朝鑑次者天氣有威後
 日景理朝臣相語曰至上你云我向此事衆人不
 知而資伴之所申之相叶心所感也若此件鑑事
 右相府何也又有清慎公此只傳又江左大丞況

云神聖箱蓋煙宝鏡之組煙籠之由見延喜所日記
 是秘事也非普通所況之也 ○今書るる得徳年一
 朝奉大りのまきよ中江津舟を引く朝奉の儀や
 ちりらあらしとをいふ所叙るをけしむるのまきよ
 朝奉のまきよとて

○白朝巻 ちりらとて

○愚得徳年一白朝巻のあり抄白大りの例を柳子
 白鏡のひら朝巻の正廿白鏡のひら朝巻 目貫き
 小服指りのまきよ白朝巻のまきよ 朝儀記七段奥より
 のまきよのまきよのまきよ今一なる朝奉のまきよのまきよ
 下るるまきよのまきよのまきよ白朝巻のまきよのまきよハ大
 龍のまきよのまきよのまきよ海入のまきよ ○書る後の内よ
 入るまきよのまきよ朝巻のまきよ大りのまきよのまきよ
 ○早家物語 初の水うまきよ鳥唱る白朝巻のまきよ
 新らぬまきよのまきよのまきよのまきよ中比より鳥唱るまきよのまきよ

らぬまきよのまきよのまきよのまきよ白朝巻のまきよのまきよ

○延平盛長記 盛徳を名取のまきよ

ひら朝巻のまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ
 まきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ

○黒朝巻 くりらとて

○大石寺より得徳物語 夜けのまきよ十中りまきよのまきよ
 赤銅のまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ
 まきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ
 盛りの黒朝巻のまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ
 仰るまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ
 けのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ
 柄朝巻のまきよのまきよのまきよのまきよのまきよのまきよ

○海老朝巻 まきよのまきよ

○伊豆家礼式書

○巻銀 すまのまきよ 或時大り 巻大りの朝

取くろく三練澤の太刀と肩のけ腰より白く合さる
鞘の形をすそまゝの太刀にわたりてしるす

○徳平盛衰記 枕を巻き練澤の太刀柄と通合
なりし物なり

○甲午太刀 一箇年

○思得徳平巻甲午太刀 画柄口銀目利書中に
瀧と云ふ一文字あり一文字に平作とありて
い箇年と云ふは今日迄の事と云ふ事なり
甲の字の下の字の平は思得の字なり
小福の唐刀の下の字の平は思得の字なり
記 一箇年 同 徳平作りの甲午の太刀等
又九すき 同 徳平作りの甲午の太刀等
おのぬ入秩父の事 尾島山内守能の二男次子
おのぬの字を甲午と云ふ事なり
おのぬの字を甲午と云ふ事なり

いふ事なり
云々如く徳平作りの事なり
音々々々

○怒物作銀 一箇物造

書記も

○万歳之圖書

虎の皮の虎靴の事なり 是は兵庫淡路七足柄曹令が余
の太刀にありし物なり 式すらしるなり
村載年 稀遷春碩藏 勃城の皮を靴と縫ひし物なり
怒物作りの太刀と云ふ事なり 駿河守河内守と羅山とい
ましる事なり
○徳平盛衰記 紺糸織の腰巻と云ふ事なり
幅より寛ゆる物なり 太刀に眼をくく
○平家ゆき 唐
綾織の腰巻と云ふ事なり 太刀に眼をくく
まゝの太刀 徳平の事なり 同 徳平 宣公の事なり

緋威の境まで、是邊の谷川よりいふゆいのさりと
 ○平古物語 信頼と信西（信西と云ふは信朝の弟なり）、行状と云は、
 りつものゆい、さりとて、東の、中つ、ゆいの、ゆいとて、
 〇思得邊
 筆き、一、居持、り、ゆい、ゆい、指の、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 柄の、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 ち、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 書、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 今、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇太
 平記、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 道頼、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 の、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 指、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 ○鳥庫鎖、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、

○大石寺、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 左、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇庭、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 染、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 源、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇多、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇多、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇古、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇水、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇武、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、
 〇武、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、ゆい、

○冬有保之平右物持 信西入リルル 家ノ侍人
シラ小瓶よりつひの鞘の太リキヤ ○今聖止るるヤ全
浪洞の類々ニテ宿の迄色リシラ鞘ヲ入ル

○貝鶴太リ ○カハシのさのしり

○太平江 乃平上格の卒 四尺七寸の貝鶴の太リカハシ
鞘ハ河内ノサケメ ○同 栢弓竹最後条 和田新嘉治
ナカニシテ此トモ類々有ルル定々ニ四尺七寸の太リノ貝鶴の尺
ハ無の介シラカハシ

○出今太リ 出今ニシテ

○出今太リ 出今ニシテ

○刻鏤太リ 豹の皮の鹿鞘ノサケメ出今ノハシ

○延喜式 凡刻鏤太リ 非新作藤五位己上著

用 ○瑞瑞柄太リ 瑞瑞柄太リ

○瑞瑞柄太リ 瑞瑞柄太リ

○錯拵 保平四年三月廿九日除時等櫻政全

作通銀時唐草瑞瑞柄也

○瑞瑞水精柄太リ 瑞瑞水精柄太リ

○鷹司家侍拵 瑞瑞水精柄太リ 因也禪局

所命云瑞瑞水精柄太リ 柄銀者晴所用也但瑞馬

ハ不用

○持太リ 持太リ

○千如尾草太リ 乃紙ヲ送ラシ行リ 栢水の内ヲ持
太リトシテ 母尾草ハ記ノ云 以テ水名ニ銀柄ヲ
人許書中書持シ字馬牛及絹布等相副行ノ也
可也身銀ハ相副也

○聖柄リ 聖柄リ

○聖柄リ 聖柄リ

○聖柄リ 聖柄リ

○聖柄リ 聖柄リ

○聖柄リ 聖柄リ

○聖柄リ 聖柄リ

西

カハラント入 瀬訪明神ニ祈念シテ 腰リヲ取テ甲ノ上帯
小丹氣切良久シテ僅ニ汗顔ニ出ル 此年盛長記
カハラント入 瀬訪明神ニ祈念シテ 腰リヲ取テ甲ノ上帯
小丹氣切良久シテ僅ニ汗顔ニ出ル 此年盛長記
カハラント入 瀬訪明神ニ祈念シテ 腰リヲ取テ甲ノ上帯
小丹氣切良久シテ僅ニ汗顔ニ出ル 此年盛長記

○ 愚得危辛ニ 腰リ 易折 服者 道世 三ノ 服
指ノ 明徳ノ 比ト 見セヨ 腰リ 易折 服者 道世 三ノ 服
○ 東遊 武田 自 腰リ
反 行 平 同 春日 刑 却 之 予 貞 行 水 底 此 迄 今

カハラント入 瀬訪明神ニ祈念シテ 腰リヲ取テ甲ノ上帯
小丹氣切良久シテ僅ニ汗顔ニ出ル 此年盛長記
カハラント入 瀬訪明神ニ祈念シテ 腰リヲ取テ甲ノ上帯
小丹氣切良久シテ僅ニ汗顔ニ出ル 此年盛長記
カハラント入 瀬訪明神ニ祈念シテ 腰リヲ取テ甲ノ上帯
小丹氣切良久シテ僅ニ汗顔ニ出ル 此年盛長記

の夢に入妙を付らぬは、今人の腰に
流り赤い糸は、火打袋をひらきの地

○大腰刀

○明日記 元仁二年乙酉二月廿五日 去夜野を
夢想今年去逐物治思仍明日欲精を面行汗
物指人着け家廿二日見聖靈令以殿大幼ま母依
相吉手治ま大幼を若修衣指大腰刀以浪作紙
相様紙大腰刀相具る長二人中房同各治ま
古祝のまき今つらぬをぬもけり腰刀世つらぬぬ
しつらぬ

○小太刀

○千吸瓦書 小太刀より名目昔ちうり
の程を信し、早家ゆ危十子藏人行家高
行家元午の龍大り行元午の合依り小太刀行
多行病走、まに行家と、合言たの午を

小太刀のまき、幸治のまき、
合じ一吸六りを初に、まき、
の名目古うり、
まき、洗筆の澄、大太刀小太刀二振等

○小

○東鑑 依木こ盛鑑小カラ鞋、
ニスエ子真小童ヲ以テ山宿可ニ送也ス、
記、
○宗五記
○柳管盛鑑等思小口
○ま木集 今に次あり、
○おん小口の世、
○おん小口の世、

○打物

○思得鑑等 鳥羽九日、

大カ打ぬとらして ○東鑑 ○佐賀白平大夫少旨ヲ伺

ニ面傳へ處懷中ニ一尺餘キナリヲ帶括如寒氷 ○逸

平盛長江ハ黒幸威リ脈卷キナカ動シタリ ○同

合武ニヤリ判の若キリとら叶リと ○同 ○同

コトハキリと豊長ノセタリ合ハシキル ○同 ○同

又信運合物の女萬成アリ移シ合武ニハノ殺免ア不左是の

大カ麻卷ニ石の山キリナリノ塔を向ハシ ○平家内

治 爾莫自ひの脈卷を悉キリカキキ ○大波ハ

ナリトハ是のナリ指ラ思ハシカ ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同 ○同

○木太リ

の教ハ木リ涉及や用ナクハシキニ錯合リ細太リヤ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

○木太リ

荒田を渡り同毛の曹の姓門より八十八寸の太刀 ○太平
江 和田利貞と傳書と名高くは幸の遣は太刀
小太刀ニ振る

○佩係 ちんちん 佩副 ○脇差の作り

宗立記 多分極まる所現の行らるる古一ノ夜
輪を今にあらしものより及りて大足つらり
まゝ今にあらしものより及りて大足つらり
金仙寺のありて又社家の倫徳寺のありて
足つらりて是の形等名実りて今にあらしもの
まゝ今にあらしものより及りて大足つらり
方の入りて

○脇指口 口は口の カサナ ○脇指の作り

○太平記 多分極まる所現の行らるる古一ノ夜
輪を今にあらしものより及りて大足つらり
まゝ今にあらしものより及りて大足つらり
金仙寺のありて又社家の倫徳寺のありて
足つらりて是の形等名実りて今にあらしもの
まゝ今にあらしものより及りて大足つらり
方の入りて

○口脇指 口は口の カサナ ○脇指の作り

奇大難珍集 鷹に社中のりて東洞渡と云
食とのありて是の形入るに 鷹の比をて清出と云
と外取込みのありて又の惟るに脇指のありて十徳
口脇指と云ふは中より肩衣四幅のありて首
のありて子造りしけりて ○ 鷹の比をて清出と云
古に井の脇指と云ふは明位の下に 脇指と云ふは

○銀口 口は口の

○大午記に河新幸 中司と云う相づらふ事ありて
大日しりしれを在りていしりて一度入るりすなり口以取
賜りて大日と云う胸をさすなりと云ふ事あり

○大小腰りの説

○四民本傳卷下 洋の事あり其の如く其の便業あり
きりしりて今午士を考るれば大日のわらひの如く
きりぬる事あり 別遣さる大日と振りり然言はるる事あり
御書の太日の事あり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
午終りて大日と云う 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
と云ふ事あり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
理より新屋の事あり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
此の如く 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
ゆゑに大日と云う 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
口以取る事あり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
今午終りて大日と云う 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり

○服指

ワラゴ 服指と云ふ 袴と云ふ 服指

の大日と云う 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
如く大日と云う 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり

○明徳記に將軍家おの事あり

○大午記 最勝毒及御淨糸 山の
元後列立りて 申す事あり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
と云ふ事あり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
服指と云う 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり

○愚の愚事 腰りあり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
賜給りて 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり
腰りの事あり 故より大日の事あり 礼家言ふ事あり

つゝあつきのゆゑまのくぢり提督とありて大
平の御親思ひきり一萬世のゆゑまのくぢり茶
家治若のゆゑまのくぢり山田宗編列号不審居
とらるる茶人細工ゆゑまのくぢり茶酌の余行を竹筒
より小口の室が造りゆゑまのくぢり不審居と沼沙郎と名
の袋まのくぢり火打袋と名は二箇合と提督と名
付り今の高ゆゑまのくぢり火打袋と名は百條と名付
つゝあつきのゆゑまのくぢり

○太平記 降冬自害と全 夕し夜々ゆゑまのくぢり
入道名常信茶入を道勝と名は夜工提督と名
降人のゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり人たるゆゑまのくぢり
茶二折り了 採桑老の樂は樂家と名はゆゑまのくぢり
出家の指考ゆゑまのくぢり指考ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
繼ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
樂の採桑老と樂家と名はゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり

同くまのくぢり ○今梅は採桑老の樂はゆゑまのくぢり火打袋と名は
なぐと上下の緒を茶入ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
今樂家の相付ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
尺妻仕まのくぢり火打袋と名はゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
青磁ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり

○守り まのくぢり 護録 護り東鑑
○慶光記 行成ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり

取ゆゑまのくぢり守りゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
○義隆記 ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
守りゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
ゆゑまのくぢり東鑑 若君誕生と名は佳例と追テ御
家人半御護りゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり
ゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢりゆゑまのくぢり

のやゆ花の 祐治の後ろく 新らびより ○今更守
りの制式ハ軍器考も亦洋中より 義経記より守り
付地の御事ハ 桐鞘巻 今更守の御事ハ 箱王
の守りハ 赤地の御事ハ 桐鞘巻 今更守の巻とま
包との御事ハ 何の御事ハ 室河殿の御
り大りハ 新袋 今更守の御事ハ 宗亮
今更守の御事ハ 伊丹貞女の家より 少島丸の
大りハ 今更守の御事ハ 付地の御事ハ 巻く
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 是ら包鞘巻 桐
今更守の御事ハ 守りハ 今更守の御事ハ

○後拾遺集十九卷 今更守春更より けり行或移り敷
儀理ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ

東鑑 法皇御護脚靴吠を時魁

○少り ちるびり

○伊丹家礼式書 伊丹あり供りハ 七更守の御事ハ
伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ
伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ
伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ
伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ
伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ
伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ 伊丹あり供りハ

○古り 今更守

○古歌 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ

○古歌 七首

今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ
今更守の御事ハ 今更守の御事ハ 今更守の御事ハ

○古事記上其和近将返之時解赤佩之紐小刀著其頭而返故其一尋和尔者於今猶佐比持神也

○刀子

○延喜式 凡刀子及長五寸以上不得輒帶但衛府者聽之 ○今案刀子之長短之のり劔の惣柄

もた又小長短のりちりちり子助格も扇子床古刀子の如し今西土に望の字以ゆらけりり

○鎧刀子よりいこい 鎧徹 又鎧通 ○案女

○七首 日比の記 懐劔と云々

○七首の論 世に七首といふ物も古に久しきと懐

劔も古に久しきと云ふ所の劔は世に久しきと懐

論しるも七首の常にもりて常と云ふも貴人の

或は茶のゆり席の如し是は解のりは存するも別類に
しは席のゆりもくく人々言ひて言人しを或は解きたり
彼はゆりもくく言ひて言人しを或は解きたり
の劔もくく言ひて言人しを或は解きたり
彼はゆりもくく言ひて言人しを或は解きたり
始り組す一彼又解きたりは何れ七首はゆりもくく
やまもくく言ひて言人しを或は解きたり
又近年生の言ひて言人しを或は解きたり
ちり臆病はよりいこい言ひて言人しを或は解きたり
く人々は解きたりは何れ七首はゆりもくく
何れもくく言ひて言人しを或は解きたり
りんサレてはゆりもくく言ひて言人しを或は解きたり
終り古の言ひて言人しを或は解きたり
首へくく言ひて言人しを或は解きたり
はゆりもくく言ひて言人しを或は解きたり

さしなすしと又組ひ新くつらる懐工坊く腹を指ひ
怪我のしほりともくさげふ合く大女史の持へるゆ
りくしく足すの解るごとく杖をく徳ちらわりの七首
てまへしあき臺りの再考しきくつらるる○この文
自陸奥先主北華のゆめゆめ貴習ちるゆめこ
又い喜るの故ゆめくかきりらるるゆめまき
わりの三

○紐小刀

ひきくさ びのりな

○短刀の紐

舟よりあつたて一日切にふ比毛加多奈との
以今い古事記を細小刀北書に僻事
細い紐の落ちるゆめゆめ今懐銀守りゆめ
皆毛送制

○古事記上於是送後田毘古神而還到乃追聚
諸廣物贈狹物以同言伊者天神御子仕奉耶之
時諸魚皆仕奉白之中海鼠不白尔天宁受賣命

謂海鼠云此口乎不答之口而紐小刀折其口故
於今海鼠口折也是以御世御世之速贄獻之時
給後女君等也○海神云云即卷召集和逆魚向
曰天津日高之御子虚空津日高多將出幸上國
進者我日送奉而覆奏故各隨己身尋長浪日而
白之中一尋和逆白僕者一日送而還来故尔告
其一尋和逆尔然者汝者送奉若渡海中時無令
惶畏而載其和尔之頭送出故如朔一日之内送
奉其和逆將送之時解所佩之紐小刀著其頭而
送故其一尋和逆者於今謂依比持神也○日本
記至仁帝紀后母兄狹穗彦王謀反欲危社
稷因伺皇后之燕居而告之曰云願為汝殺天
皇仍取七首授后皇曰是七首佩于胸中當天皇
之寢廼刺頸而殺焉

○懷銀

くろひ丹 ころろろろろ

類聚名物考卷之

式部 十二

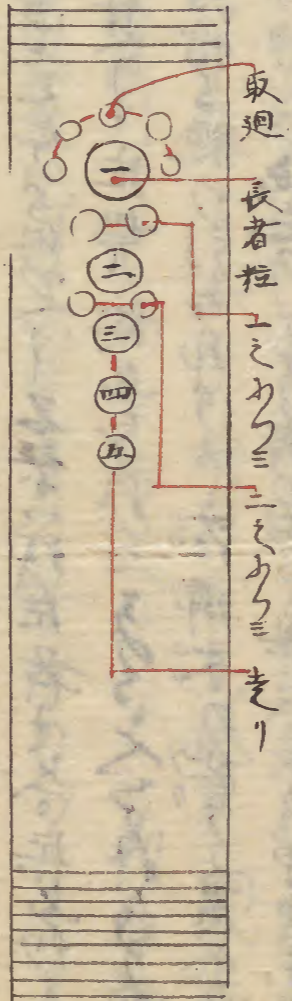
刀劍装具

鮫更皮 ころり

ころりく口鮫装具

西土の物... 國朝... 鮫字... 刺... 押鮫... 粘鮫... 藍鮫

柄鮫皮四



廿俗稱... 第一親鮫... 長者粒... 一のめ... 二三四五と絶く走りと云次

た右と二のめ... 親粒の傍に取廻り

古款 春多サリ... 馬の所... 在部下

世の中... 口も... 走り

本草經目 鮫東南海皆有之有數種稍異而

皮一掌赤目赤頰背上有鬣腹下有翅大者尾長

數尺能傷人皮皆有沙如真珠可飾刀鞘

吳都賦 扈帶鮫函。注良曰鮫函以鮫皮飾刀

南海異物志 鮫魚皮可以飾刀

宗五記... 唐木の鞘のり... 鮫鞘

唐木の鞘のり... 鮫鞘

鮫魚皮種類名品

しや... 古賦 國産

鮫魚皮種類名品

しや... 古賦 國産

谷鮫魚

りりり

海子藍

りりり

非鹹

川較皮

りりり

麻のり

藍較

りりり

徐氏筆精

魚皮為之堅硬如石海中魚名較魚或以為鯊

皮非也魚皮漚起細刺如疾蒸

りりり

刻縞緬

りりり

地吾

南垂

りりり

虎較

りりり

徐氏筆精 周産銅鉄の劔甲天下劔鞘以較

魚皮為之堅硬如石海中有魚名較魚或以為鯊

皮非也魚皮漚起細刺如疾蒸

鞘

西漢書九十一貨殖傳質氏以洒削而鼎食

師古曰洒濯也削謂刀劍室也謂人有刀劔削故

惡者主為洒削之去其垢穢更飾令新也

錯環枚半麟黑室公卿百官皆化室不半較

虎文其將白虎文皆以白珠較為鑄口之飾

者加翡翠山紵翠其側

後漢書三輿服志 佩刀乘輿黃金通身貂錯

半較魚鱗金漆錯雌黃室

刀室

刀函

後漢書三輿服志 佩刀乘輿黃金通身貂錯

半較魚鱗金漆錯雌黃室

刀室

刀函

天子之服

黃令作

鮫を文へて金縷を交へてなるもの鮫魚皮より
口部へ装ふもの云云鮫魚皮可以飾りたるを
異物とすは是れ列す本草にも

○愚得逸筆に鮫巻 馬折鮫巻或は凡右巻なるもの
きゆに鮫の向を巻くもの鮫巻よりは是れ勝り土佐
老信の古も職人の鮫巻切りたるもの今刻
鮫の形なる 佐奈田より指す言遠く見れ鮫巻
の形なる 鮫巻の形なる 古く鮫巻は是
あつたはらうに勝りしなり 知る 古く鮫巻は是
り刻鮫を巻くものなり 佐奈田より指す言遠く見れ鮫巻
鮫巻は是れ是れなり 鮫巻は通 鮫巻は
○東鑑 此の鮫巻は 早家物也 其の後を
の降すす許キをけり 鮫巻切ること勝りしなり
と云 鮫巻は是れなり 鮫巻は通 鮫巻は
之儀一統 騎馬の所供の形なるなり 大直女

鮫巻のりより云へり ○宗五記 口の鮫巻は勝りしなり 下は

○延平盛表記 忠盛は是れなり 鮫巻は是れなり 又下は
巻は是れなり 子の内を捲くものなり 鮫巻は是れなり
りしなり 義経は是れなり 鮫巻は是れなり ○早
家の唐 北の水より上鳥羽より鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり
是れなり 延平盛表記 忠盛は是れなり 鮫巻は是れなり
東鑑上は是れなり ○江注抄 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり
事 又於白の鮫巻有は字許巻付人なり 如何なる資付
白自撰進言なり ○室の鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり
の鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり
の鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり

○尾鮫 後鮫 又云 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり

へいしなるものなり 昔は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり
後鮫は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり
河内後子の名なり 河内大の記 鮫巻は是れなり 鮫巻は是れなり

福島伊予守の事... 虎の皮の事... 卷の... 名目... 後部... 行幸... 四位将用... 小位入部... 行幸... 大将并公卿... 錯抄... 行幸... 催着... 行幸... 入部... 是軍旅の身... 豹虎熊... 近世... 筆... 是軍旅の身... 豹虎熊... 近世... 筆...

ハ部皮の虎部... 名目... 後部... 行幸... 四位将用... 小位入部... 行幸... 大将并公卿... 錯抄... 行幸... 催着... 行幸... 入部... 是軍旅の身... 豹虎熊... 近世... 筆... 是軍旅の身... 豹虎熊... 近世... 筆...

○明月記 春日祭近所使此物付存修銀田銀
加鹿皮引尾鞘きき ○愚得愚得 愚得愚得 春日祭近所使此物付存修銀田銀
改用引尾鞘きき 用子子 愚得愚得 愚得愚得 春日祭近所使此物付存修銀田銀
鞘きき 細尾鞘きき

○熊皮尾鞘 くのりくのり のきのき ぐや

○冬乃保冬乃保 冬乃保冬乃保 冬乃保冬乃保 練潭練潭 の金金 大日大日 三尺三尺 寸

○冬乃保冬乃保 冬乃保冬乃保 冬乃保冬乃保 練潭練潭 の金金 大日大日 三尺三尺 寸

○冬乃保冬乃保 冬乃保冬乃保 冬乃保冬乃保 練潭練潭 の金金 大日大日 三尺三尺 寸

○虎皮尾鞘

○大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記

○大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記

○大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記

○大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記

○大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記

○大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記 大平記大平記

九月十五日殿記曰後鞘の冬乃保

○猪皮尾鞘 力のり力のり のきのき ぐや

○大平記 猪の皮の尾鞘の冬乃保大平記 ○江家次

○大平記 猪の皮の尾鞘の冬乃保大平記 ○江家次

○班猪尾鞘

○大平記 仁平二年十一月十日春日祭近所使此物付存修銀田銀

○大平記 仁平二年十一月十日春日祭近所使此物付存修銀田銀

○大平記 仁平二年十一月十日春日祭近所使此物付存修銀田銀

○大平記 仁平二年十一月十日春日祭近所使此物付存修銀田銀

○大平記 仁平二年十一月十日春日祭近所使此物付存修銀田銀

○豹皮尾鞘 一のり一のり のきのき ぐや 竹豹竹豹 らら

○大平記 仁平二年九月十日殿記曰仁平二年九月十日殿記曰

○大平記 仁平二年九月十日殿記曰仁平二年九月十日殿記曰

○大平記 仁平二年九月十日殿記曰仁平二年九月十日殿記曰

○大平記 仁平二年九月十日殿記曰仁平二年九月十日殿記曰

○大平記 仁平二年九月十日殿記曰仁平二年九月十日殿記曰

○ 野文等所取定其者 況修所取者人多用尾鞘
 の竹豹と棒竹の豹は是對水豹 亦竹豹少は左等
 と豹虎皮は同改家色葉字類抄に竹皮とあり
 訓を付し竹皮と虎豹の皮は豹竹豹竹一圖書以
 虎豹のみと書竹林は竹皮の名あり○ 錯抄
 保元一年或取記曰水豹尾鞘を青草装束
 左右の楯佐^推尾鞘虎皮
 ○ 鹿皮尾鞘 三つものりしこと
 ○ 魚形尾鞘 うづめりしこと
 ○ 香繪尾鞘 ありしこと
 ○ 繪尾鞘 ありしこと
 ○ 江家次第 鹿皮尾鞘魚形尾鞘班猪尾鞘無
 繪尾鞘臨時競馬祭 左右家尾各十人騎馬相
 向具装束繪尾鞘^左魚^右
 ○ 唐皮尾鞘 ありしこと

○ 建武二年の記 武若所輩了知修し中唐皮
 尾鞘切竹細く不爾
 ○ 鹿皮細尾鞘 ありしこと
 ○ 明月記 文暦二年二月九日春の祭并所自
 内府亭の立下向より己竹汗のりし次并植卷修
 又指貫筋木衣紅草衣羊靴并銀^{鹿皮}尾鞘^細侍十人
 ○ 刻鞘 ありしこと
 是より且巻りしこと

○ 或古記の信長公の事 森南もその幼少
 利發するを得し人とも日沙付けり故所信長公爾處
 ありし竹南九井りし居けりし所のりし
 と逆南の向刻鞘を平らに削りし
 ありし竹南九井りし居けりし所のりし
 ありし竹南九井りし居けりし所のりし
 ありし竹南九井りし居けりし所のりし
 ありし竹南九井りし居けりし所のりし

のり後靴

○錯抄 或言云布衣騎馬蹴鞠所着不執柄
字俗傳奉子雅性如子野勃使相伴所穿野劍或
虎皮細尾靴○東鑑 江判官能靴布衣冠章緒
細尾靴太刀部等之人雜色四人調度懸一人放
兔一人○鳥得為年 奉子野勃使奉の奉使路取
用引尾靴これ用平靴也

○梅花鞍靴 靴魚皮の文柄をのりたる靴を
年中行事に打海梅花太刀部等と記す打鞍と
一所は打鞍太刀部等と同物也但平記に靴金作を
りては打鞍と記す河又しりては靴の字書
に鞍と同し故由是とて異名との言ふ未詳河を
まのりたるものも未見るれは俗に打鞍と

と云ふのりたる靴の制のりたる靴と云ふ白
介殼と云ふ靴を金入と云ふ又卵靴と云ふ
相似鶏卵殼と云ふ仍し和漢之才因會等と云
文字と云ふ但し下字条に靴のりたる靴に
○和雨雅 梅華鞍侍俗以河鞍梅花鞍等貼靴
上以馬飾歐陽公日本刀歌所謂魚皮裝貼香木
靴是也○太平記 中殿の令の太刀
同 打靴 入の太刀 ○鎌倉年中行事 打海
梅花太刀 打鞍太刀 ○大諸礼 打の装束
しつひ唐木靴のりたる ○下字条 靴のり用
日本俗所作也又云梅華皮也。又云鞍皮馬刀
靴又名洲客泣淚成珠者也

○錦包靴 中古靴は皮錦

等と云ふものも未見るれは俗に打鞍と
義詮記にも打鞍と云ふ

○宗五記 子孫傳記の序に云く大日すに
依倫を以て今に云く此の事かき及りて大日
ふらつらと云く今に云く此の事かき及りて大日
らして今に云く此の事かき及りて大日
朝に云く此の事かき及りて大日
が今に云く此の事かき及りて大日
らして大日と云く此の事かき及りて大日

○所免 柿澤幸包 二ツシガタのつらや ○所免

華の南地の草の皮を竹のうすき草と云く

○義経記 赤洞のりたる草と云く一尺三寸

○柄鞘金合 つらやまきしら 厨斗村のつら

○書 柄鞘金合のつらやまきしら

今と同めし今に判りし柄鞘金合のつらやまきしら

○太平記 名家或家屋柱の年 柄鞘金合を云く

○宗五記 又若く人云く
留之地は豊地のりたる草のつらやまきしら
近年人の所指すは前より如く小者扇らしら

○宗五記 京の軍の序に

のたつらに口室のりたる草のつらやまきしら
鄂を云くしら伊の原の家を云くしら小鳥を云く
たつらに建武のりたる草のつらやまきしら
らしてしらの序に云くしら後明ま
つらに云く義経記に云くしら伊の原の家を云くしら京
の軍の序に云くしら伊の原の家を云くしら

+

きりしりたる...
きりしりたる...
きりしりたる...

○銀之小蛭巻 志りしりたる...

○伝年盛表記 山木判官夜討...

○柄巻の取巻のゆき... 銀の小蛭巻...

○義経の取巻のゆき... 銀の小蛭巻...

○巻柄 志りしりたる... 纏銀首

○古語拾遺 至長谷朝倉朝泰氏...

○佐族泰酒公進仕蒙寵詔娶泰氏...

○領百八十種勝部露織貢調...

○豆麻佐。住乃以泰氏所貢...

○猶然。案以双指銀首...

○柄巻 志りしりたる...

○或珍多 柄巻掬し細川三好流...

○四氏抄... 服巻... 大諸礼...

○鳥羽子の所記... 今案...

○本池柄の武佐の...

○曹金 志りしりたる...

○宗五記 志りしりたる...

○石突曹介...

○志りしりたる...

○志りしりたる...

○志りしりたる...

○志りしりたる...

○志りしりたる...

○志りしりたる...

就佛律石村所成神名石折神云云次集御刀之
狩上血自手取漏出所成神名周旋加美神

○白刃 ちりり

○呂覽七孟秋紀禁塞 犯流矢踏白刃加之以凍

鐵鐵寒之患

○所しん

○千加可草七リ劍の所しん合ともり

○人形より東の字世用りへて喜式鳥庫式より世用り
子細くの世分兼合兼よりりへて兼の字書に也執
也と注ししんはちりり上界しんはり

○諸刃 もりり

○丈夫葉 〆切しんもりり

〆切しんもりり

○丸刃 すりり まりり

○古歌 今切しんもりり 〆切しんもりり

○鉏金 〆切しんもりり 脛金 脛巾金 〆切齒

○佐平盛美記 平家都府の条 一守り物

〆切齒 或切刃 〆切齒 小切齒 切齒

〆切齒 〆切齒

○宗六記 錦色朝衣曾今の条

〆切齒 〆切齒

○鏡子 〆切齒 〆切齒 打鐵

〆切齒 〆切齒

○宗五記 伊勢の條 浪介銀の打鐵

○冬午記 中殿所令し奈 打鍼入る所の事 ○彈
念年中行事 打鍼の事

○目貫 ありあり ○古く ○古く目貫の古く目貫

の事とありあり目貫元とありあり今目貫の飾あり
目貫の列ありあり或はありあり
今俗に生む連籠ありあり又目貫の事あり

○愚得道半ニ高所近世の口作りに中する事あり

まゝにありあり目貫元ありあり目貫の事あり

古の事ありあり目貫元中ありあり 口説の事あり

表ありあり目貫ありあり目貫の事あり 指表の事あり

今も古く目貫ありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

ありありありありありありありありありありありあり

佐馬集

はまの股を突刺す所の筋をたゞしきく今を以て
から太りやういふ大なるものなりとすの人はより
はまの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
はまの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
はまの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
はまの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
はまの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
はまの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
はまの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て

○草先金く文

ひらたたるなりとす

○宗五記

今宗五記をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て

○折金

こつりの 逆角 引つりの 反角

古にきくぬらひの筋をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
後角をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て

○伊勢泉式書

たゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て

いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
いづれもたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て

○太刀鞘

一冊二冊の事

○秋齋問答

太刀の二の事

輪二の論をたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て
たゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以てたゞしきく今を以て

○足向

足向の事

宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記

○股寄

太刀の股寄の事

宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記 宗五記

山判五行、論以刑德、用以陰陽、持以春夏、行以秋
冬、云云 ○音義、鐔司馬云、銀也、一云、銀後也、五
谷及、鐔音、海、之、蒼、云、徒、惑、及、銀、口、也、徐、云、謂、銀
鏤、也、司、馬、云、銀、耳、也、史、古、協、及、司、馬、云、地、也、一
○本、作、銀、同、一、云、鐔、後、稜、向、背、銀、後、稜、向、丹、也

○練鐔

練鐔の入りしり

○冬、冬、修、毛、平、佐、抄、云、練、鐔、の、太、刀、の、身、も、ま、り、丹、前、に
○同、形、西、へ、ら、多、形、練、鐔、の、寫、藤、の、太、刀、之、入、八、寸、五、尺、の
尾、新、く、ま、り、也、大、石、十、丈、り、學、以、ゆ、也、此、の、後、次、き
股、前、の、ま、り、し、り、○治、平、監、表、記、札、在、新、學、練、鐔、の、太
刀、論、練、金、酸、し、り、は、ひ、く、磨、き、ま、り、○同、筒、丹、降
丹、之、上、の、太、寫、鐔、の、太、刀、之、入、八、寸、五、尺、の、練、鐔、也、

○窠鐔

○千、加、万、草、九、太、刀、の、柄、輕、の、太、刀、之、り、の、柄、改、也、寫
の、く、窠、の、形、也、け、し、り、ま、り、風、金、し、今、り、柄、し、り、

何、し、行、幸、ま、り、持、奉、ま、古、事、用、力、く、天、之、の、功、徳、を、今、ま
り、入、く、窠、の、字、和、名、抄、し、り、の、と、と、詞、と、今、の、柄、と、ま
り、改、り、返、國、之、の、不、民、神、の、神、樂、粘、初、了、窠、の、付、り、也
太、刀、の、形、も、或、多、形、也、故、に、返、國、ま、り、窠、の、し、り、と、
ま、り、付、り、の、し、り、也、格、送、舟、の、窠、修、長、の、後、り、
く、修、長、さ、り、粘、初、の、舟、ま、り、也、故、に、返、國、ま、り、の、
付、り、ま、り、也、知、り、ま、り、又、ま、り、又、ま、り、太、刀、の、形、窠、し、り、
柄、し、り、の、後、世、に、ま、り、の、形、以、用、ひ、ま、り、太、刀、以、形、以、
柄、ま、り、也、形、の、か、又、ま、り、の、形、以、用、ひ、ま、り、是、利、義、
故、に、軍、功、也、ま、り、け、し、り、初、り、窠、所、家、の、形、也、

○鐔種類

○千、加、万、草、太、刀、の、形、窠、の、柄、し、り、也、

○しり

同上

○鐔

つら

○西漢書九十四句收簿下單于正月朝天子于甘泉宮云賜以冠帶衣裳金玉之也師古曰鐔劍口孟康曰標首鐔衛盡用玉為之也師古曰鐔劍口旁橫出者也衛劍鼻也鐔音海衛字本作鼻其音同耳○前漢書七十六趙廣漢傳又官銅物候月蝕鐔日劍鈎鐔致效尚方事○注師古曰鈎亦兵器也似劍而曲所以鈎殺人也鐔劍喉也又曰鈎似劍而小漚鈎音滂

○鐔

○後漢書十之竇憲傳斬溫禺以釁鼓血尸逐以漆鐔○注溫禺尸逐皆匈奴王号也周禮殺人以血塗鼓謂之釁鐔也○前漢書七十八蕭望之傳願竭區々底厲鋒鐔奉方分之一○注師古曰鋒月端也鐔月旁○前漢書二十六王褒傳乃至巧治鐔于將之模清水淬其鋒越砥鍊其鋒○注師古

曰淬謂燒而内水中以堅之也鋒月芒端也淬音千内反芻月旁也○文選聖主得賢頌王子闕乃至巧治鐔于將之璞清水淬其鋒越砥鍊其鋒○注注又曰鐔劍月也劉良曰鍊謂磨也○今案此鐔逆各切刀劍刀鋒按也○今案此鐔乃切先のシテ
~~~~~  
音の字書の是也○又案此鐔乃切先のシテ  
~~~~~  
燒く母もろくろく焼く又選の良も鐔アリと訓リ
~~~~~  
三ノ 三ノ

○峰

○明月記云仁七年二月十日入夜中乃末次云浮陽天乞と云者在宛東主官痕子息云云息在京父書辨在宗子良又通件考月婦雲客之下相見正月晦此標禁裏近習殿上人者入卧件所一問大乞搦之面縛以太刀之峰打又打砍其面可采馬行寮山馬仍引進於大内云也





○ 眞鋼 漢書 卷九十九 上 眞鋼 漢書 卷九十九 上 眞鋼 漢書 卷九十九 上 眞鋼

○ 夢溪筆談 鍛鉄 所謂鋼鉄者用柔鉄屈盤之

○ 及以生鉄 陷其間 泥封 鍊之 鍛令相入 謂之團鋼

○ 亦謂之灌鋼 此非眞鋼也 偽鋼 爾 眞鋼 雖百鍊不

○ 耗 出磁州 鍛坊 ○ 此以土灰 乃 鍊鉄 之 法 也

○ 唐 又 漢 之 方 知 鋼 鉄 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 夢溪筆談 吳鉤 名也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 曹黨 刀 ○ 周禮 考工記 冶氏 授 四 之 字

○ 書 授 于 權 切 刀 之 直 而 上 達 者 曰 授 ○ 刀 物 故 事

○ 要訣 上 大 刀 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 選 上 及 字 以 蓋 載 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 宇 彫 薨 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂

○ 血 齒 之 名 也 乃 今 南 宋 用 之 謂





元祿の詠多知賢達と云々

古事記上八千弍神將婚高志國之侶何比賣

幸行之時到其侶何比賣之家秋曰云云故志能

久遠之佐加志賣遠所理登岐加志氏久岐志賣

遠河理登伎許志氏佐用伊比阿理多比新用

伊比阿理加用伊比多知賀遠母伊麻比登加

受感流須比遠母伊麻比登加泥伊比登加

大日平緒 乃ちのりゆらや

伊留家式 大日の奉取のむらやのり

珠木の序の終に上(引)通し結ひつるふたにつる

大日らとの幸と布と云々

帯取 譯護 帯執

結ひつるふたに上(引)通し結ひつるふたに上(引)通し

珠木をりゆらや

日中行事 後醍醐天皇御

西向の御座り

日向の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

大日命の御座り

春村書、雅亮装束抄下は  
みみ、中、又同土、  
か、  
終、

蘆の字、二条良基、室所、  
装束、進、  
脚、  
和、  
終、

○下緒、  
○是、大、の、足、緒、

今、俗、  
後、書、  
山、行、嬰、具、側、  
佩、削、上、飾、鞞、下、飾、也、  
結、  
の、ゆ、

ひきり、

の、き、  
○同、色、の、  
○同、  
○宗、五、  
○千、  
○東、  
草、

鎌、

○ 帯の結（帯の結は腰の幅に付く銀太刀の形に結ぶ）

ゆりの形に結ぶ。古事記に組心の結と云ふ。この

結は、帯の幅に合致する。古田与一、殿所抄に組結と云

ふ。この結は、帯の幅に合致する。カサノ、ワラセ

重藤の書に、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

この結は、帯の幅に合致する。この結は、帯の幅に合致する。

丸すけりてさるる國に朝軍を多しとせりしにまじりて  
 此は是所付るるまじりて付る付るに結に付るる故なり○  
 高得過半にさう部をとりて刻部を巻くこころは元が  
 ちけにすけり盛業の通へりてあつるなり○ 号す十の冠を十  
 の考人の朝へりてあつるに付る付るに結に付るるにさう  
 餅をさうり結に付るるに結に合さう部を片すにさう  
 口振しりけりてさうなり考むにさうの常より丸に  
 さうにさう部を結の後より然る巻付るるにさうの故  
 なるに今もさう歸するに結を常(さう)にさうにさうに  
 ○ 腕貫緒 うてぬるなり 結 うてぬるなり ○ うて  
 りるの結を結に付るにさうにさうにさうにさうにさうにさう  
 元やさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 臂の結にさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに

○ 淮南子十五 兵略訓 明奇止之 変察行陳解贖

之教、維抱縮而鼓之。注縮貫也抱也係於臂以  
 擊鼓也。抱音浮。○ 宗五記 朝前へ一柄鼓ひり  
 寫りて金具赤洞さうにけりてさうのさうにさうに目貫は  
 羽家の紋に結に付るるにさうにさうにさうにさうに柄を  
 巻くは是所付るるに腕をさうにさうにさうに

○ 太刀長緒 さうにさうに

○ 刀の真 しろのさうに布品に社に太刀の然るにさうにさうに  
 羽君のさうに

○ 魚子 さうにさうに 今各 七子 ○ 口袋具のさうにさうに

六りの色さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 羽に朝魚朝菜とさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 のさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 七子さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに  
 宗五記 腕貫のさうにさうに

○チリ装束様式

鎧の上より一丈一尺一寸五分の長にチリの各  
具在 大法衣の長きより

のしつみ 唐本鞘 ありしき ねじ皮 あり

こり りの鞘 ありしき 鞘鍔に鞘あり 梨子地

は懸地 うらりの舟 金具あり

○公方柄州腰物装束

宗五記 子柄の州腰の鞘あり 柄章あり 黄

金鎧柄の同きものありしき 同前 州目貫ありしき 同前 州目貫ありしき

左右 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

並く黄金ありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

地金に赤銅の州目貫ありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

普懸 皮後 軍士 州目貫ありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

裳袴 同き二色あり 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

金具ありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

許ありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき

州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき 州目貫のありしき











つとて車馬の賜をうけ同毛の女奴甲より南へ行く居跡の長七尺  
二寸の標に改められたる大木に刻つたものにして、此の  
いづくに衝と稱し仁王と云ふこと、歌に「塵々名ありけり」  
御記に「八咫の門の北向所住居也」○大正に山後  
京都よりあるもの、丹波の國の住人佐佐木と云ふもの、  
法勝寺  
白西門の御馬に上りて、其の馬に上りて、  
二寸大木に刻つた御記の胸に大木のササの  
くさりの馬に上りて、押さへて、歌に「御馬に上りて西首の馬  
に上りて、御記の胸に大木のササの  
中の御記に「仁王又次等入道長孫三平甲申亥九年  
盛康同舎下河内守盛泰四入りの御記、道つとて、  
是の御記に「七尺八寸の男の髪を守り、  
きく眼尻より、御記の胸に、  
大木に上りて、御記の胸に、  
大木の御記の胸に、  
○同 紀伊熊野山守

日本書一の太刀と云ふこと、社律小次等、六尺二寸の左斬  
の太刀

○御佩 帯り 三つ折 御博士 仮名字例 ねしうり也 ○

たしとうり也の約詞、御佩と古事記日本書紀に三つ折也  
とて、御記に「仮加た世のたせと約し、  
三つ折とて、御記に「  
記 改其勇破御佩、  
心御佩と三つ折とて、御記に「  
とて、御記に「

○日本書紀 七 大足彦代別天皇 景行天皇 十之  
年夏五月卷子熊襲國、因以居於高屋宮、己未年  
也、於是其國有佳人曰御日媛、御日媛則召為  
妃、○仮名字例 御博士 漢王 御天下欲丸時者  
御日占吉山之同故、云御博士傳、素、○今書、  
御記、  
五

登可

○比礼

○古(一)神(八)の行ハリ刃也  
と云々比礼と云々也。虫魚も各々比礼と云々刃也  
の如くぬり御云々云々。韓(一)の刃也。又仇備也  
云々古(一)の刃也。刃の物也。八岐蛇の尾中云々也  
蛇の比礼也。

○古事記上其人神出見而告此者謂之葦衣色  
許男命即喚入而令寢其地室。於是其妻須勢理  
昆賣命以蛇比礼以請。投身丈夫云其蛇將咋。以此  
比礼之拳打撥。故如教者蛇自靜。故于寢出之。亦  
来日夜者入。蛇與与蜂室。亦投蛇以蜂之。比礼。教  
如先。故平寢出之云々。

○寶劍

書云光武帝人劉盆子降于此。望(一)寶劍也。屋(一)也。  
○天皇神寶の事云々。漢  
○淮南子云道應訓。荆有故次。非得寶劍。於于  
隊。還及度江。至於中流。陽侯之波。兩蛟俠繞。其船  
云云。○後漢書。劉盆子傳。樊崇乃將盆子及丞  
相徐宣以下三十餘人。肉袒降。上所得傳國璽。殺  
更始。七尺宝劍。及玉璽各一。積兵甲。宣陽城西。身  
熊耳山。存云云。○後漢書。世韓校傳。肅宗嘗賜諸  
尚書劍。唯此三人。特以宝劍。自(一)子署其名曰。韓校  
楚龍淵。到壽蜀。漢文。陳寵。南樵成。時論者為之  
說。以校淵。深。有謀。故得龍淵。壽明達。有文章。故得  
漢文。龜敷。朴。善。不見外。故得樵成。注。晋。大。康。記  
曰。汝南。西平。縣。有龍泉水。可淬刀劍。持堅利。樵  
音直。追及。漢官。樵成。作假成。○同云。古。循吏。列傳。  
建武。十二年。異國。有獻名馬者。日行千里。又進寶  
劍。費兼百金。詔以馬。駕鼓車。劍賜騎士。○又。選  
贈丁儀。曹子建。思慕。定陵子。宝劍。非所惜。○新序

○淮南子云道應訓。荆有故次。非得寶劍。於于  
隊。還及度江。至於中流。陽侯之波。兩蛟俠繞。其船  
云云。○後漢書。劉盆子傳。樊崇乃將盆子及丞  
相徐宣以下三十餘人。肉袒降。上所得傳國璽。殺  
更始。七尺宝劍。及玉璽各一。積兵甲。宣陽城西。身  
熊耳山。存云云。○後漢書。世韓校傳。肅宗嘗賜諸  
尚書劍。唯此三人。特以宝劍。自(一)子署其名曰。韓校  
楚龍淵。到壽蜀。漢文。陳寵。南樵成。時論者為之  
說。以校淵。深。有謀。故得龍淵。壽明達。有文章。故得  
漢文。龜敷。朴。善。不見外。故得樵成。注。晋。大。康。記  
曰。汝南。西平。縣。有龍泉水。可淬刀劍。持堅利。樵  
音直。追及。漢官。樵成。作假成。○同云。古。循吏。列傳。  
建武。十二年。異國。有獻名馬者。日行千里。又進寶  
劍。費兼百金。詔以馬。駕鼓車。劍賜騎士。○又。選  
贈丁儀。曹子建。思慕。定陵子。宝劍。非所惜。○新序

延陵季子將西聘晉，帶寶劍以過徐君。○文選  
雜體詩 江文通 延陵輕寶劍，李布室然諾。

○又劍 文色裝飾の多かりき

後漢書二十七 李章傳 清河大姓趙綱，逐於縣界

起塢壁，繕甲兵，為在所害。章乃設饗會，而延竭綱，

細帶，又劍被羽衣，從士百餘人，未到。

○雌雄劍 世よりりつる

抱朴子 銅有牝牡，在火中尚赤時，令童男童

女以水灌之，銅自分為兩段，西起者牡也，西下者

牝也，以此為雌劍，牡為雄劍，帶之入江湖，則蛟龍

水神皆畏避也。唐のちりつる 龍泉大河の

又玉海百五十一 張華，龍泉大河の劍の文也

平縣子龍泉水ありり劍の序の如し

又雲子將莫耶，楚王の劍

祖庭事花魁人の住り

倭軟刀

徐氏筆精云嘉靖中有倭軟刀，長七尺，出鞘地

上卷之詰曲盤蛇，舒之則勁自若。○このは汝國

是は西土の人汝國にり劍の序の如し

きつるの如し

汝國の人西土の國の如し

又傳より、品字義の倭海東日本之人也

俗呼海多之諸蛮，皆曰倭也

又雲の日本刀、歌ハ政陽

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

○歐

後漢書 四八 虞翔傳 翔坐論輸左校 防必欲害之 二日之中 傳考四獄 獄吏勸翔自引 翔曰 寧伏歐刀 以示遠近 注 歐刀 刑人之一也

○一握青蛇尾

白氏文集 卷 新劍頭詩 拾得折劍頭 不知折之由 一握青蛇尾 數十碧峯頭

○佩

後漢書 五十二 董卓傳 汝南仇卓 卓凶毒 志于殺之 乃朝服懷佩刀 以見卓 卓怒 畢揖去 卓起送 至衙 以手撫其背 笑 因出刀刺之 不中 卓自奮得免

○橫

通鑑 唐太宗紀 注 橫刀者 用皮禱帶之

橫 拉掖下

○鉞

史記 八十六 刺客傳 專諸傳 交互侍皆待長鉞 注 音披 索隱云 兵器也 劉逵吳都賦 注 兩刃小口

○露

慈恩傳 卷一 法師確然不迴 乃俛仰而進露刀 張弓 命法師前行

○帶

裝束要領抄 武官の人の職に付て 帶劍を佩く 又官の勅 夜帯劍の宣下ありて 帯を佩く 但武家 方より 之を不拘 法令 皆帯を佩く 例あり

○服

西漢書 九十五 西域傳 諾羞山 有鐵 自作兵 兵有弓矛 服刀 劍甲 注 劉德曰 服刀 拍髀也 師古曰

拍音猶解音俱

斑斕

○文選 王文憲集序任彦升追贈大尉侍中中書監如故給節加羽葆鼓吹增班斕為二十人蓋曰文憲禮也。注李善曰漢官儀曰班斕者以虎皮飾。○同 褚淵碑又王仲宣以靜難之功進爵為侯兼授尚書令中將軍給班斕二十人。注劉良曰班斕謂執斕而後行者也。○同 同 追贈太宰侍中錄尚書如故給節羽葆鼓吹班斕二十人蓋曰文簡禮也。注李周翰曰班斕木斕無及假作斕形畫之以文故曰班也。

櫛具斕

○前漢書七十二萬不疑傳不疑冠進賢冠帶櫛具斕佩環玦褒衣博帶盛服至門上揖門下欲使解斕不疑曰斕者君子武備所以衛身不可解清退

○注應劭曰櫛具木標首之斕標落壯大也。晉灼曰古長斕首以玉作并鹿盧形上刻木作山形如蓮花初生未敷時今太斕木首其狀似此。師古曰環玉環也玦即玉佩之玦也帶環而又著玉珮也。

鞞具斕

玉具斕 鞞鞞斕

ろろろろろ

○鞞時錄 霍浦甫治書云考古圖載古衣服今有玉鞞鞞玉具斕古樂府曰腰間鞞鞞此器以堦然之璞既解為環中復為轉筋而上下之隙僅通絲髮作宛轉其間今之名玉工者往往嘆其所未親按漢雋不疑帶鞞鞞具斕晉灼曰古長斕首以玉作并鞞鞞形上刻木作山形外蓮花初生未敷時今大斕木首其狀如此前說乃宋李公麟之所紀也余昔遊錢唐因識吳和之者性慧巧博物以一鞞鞞玉青色形如呂字環口中間鞞鞞旋轉

無分毫縫鐫、形色極古、人皆以為鬼工、因土漬用  
白梅熬水者之、良久脫用、詳視竅中有雙玉軸在  
焉、中嵌一物、形若牛筋、意度必是當向煮之、胖脹  
撐塞雙軸入竅、所以宛轉無礙、年深腐敗、縮  
瘦、因而煮脫、試用乾牛筋、植實置軸、兩向對勘、孔  
竅、以線縛定、煮之、少時、雙軸果湧入竅中、須臾取  
出、依前動轉不脫、後余亦收一小者、狀若旋轉、製  
作大約相似、後因損折、轉軸中亦有一物、形翎、桶  
想亦同一類、其玉具、自三代有之、今止以兩  
漢為非、至於宋朝、且千餘年、未有能窮轆轤底蘊  
今偶以煮脫、以得其機軸、亦云奇矣、  
○今字子轉  
轆轤、柄之、以車、  
呂の、  
馬具、  
金樞、  
○今字子轉

今本行、工人の、

○玉具、

○西漢書九十四、匈奴傳、下單于正月朝天子于甘  
泉宮、漢寵以殊禮、位在諸侯王上、贊錫鉉、臣而不  
名、賜以冠帶、衣裳、黃金璽、綬、玉具、劍、佩、弓、一  
張、矢、四、發、云云、注、標首、鐔、衛、盡、用、玉、為、之、也、

○利劍、

○淮南子九主述、列、不仁而有勇、果敢、則狂  
而操利劍、同、是、俗、務、列、夫、怯、夫、操、利、劍、擊、則  
不能、斷、刺、則、不能、入、

○斬馬劍、

○前漢書六十七、朱雲傳、臣願賜尚書、斬馬劍、斷  
佞臣一人、以厲其餘、注、劍、利、可以、斬、馬、也、

○百刃、

○通鑑、唐高祖紀、注、百刃、大刃也、一舉刃、可

唐六典



殺數人、唐六典曰、陌刀長八尺也、步兵所指、蓋古之

○千將莫耶劍

○越絕書

千將者吳人也、與歐冶子同師、俱能  
作刀二枚、一曰千將、一曰莫耶、莫耶、千將之妻也、  
千將作劍、采五山之鐵精、合之金英、候天伺地、  
陰陽同光、百神臨觀、天氣下降、而金鐵之精不銷、  
淪流、于是千將不知其由、莫耶曰、子以善劍、而千  
王三月不成、其意乎、夫神物之化、須人而成、今夫  
子作劍、得無得其人而成乎、千將曰、昔吾師作汝  
夫妻俱入冶爐中、後世麻經毒服、然後敢鑄、金于  
山、今吾作劍、其若斯耶、莫耶曰、師知燦身以成物、  
吾何難哉、于是千將妻乃斷髮、剪爪、投于爐中、使  
童男童女之百人、鼓橐裝炭、金鐵刀濡、遂以成劍、

陽曰千將、陰曰莫耶、陽作龜文、陰作漫理、千將匿  
其陽、出其陰、而獻之、闔閭甚重、既得、鑿劍、適會魯  
使季孫聘于吳、闔閭以莫耶獻之、季孫拔劍、劍之錐  
中、缺者大如黍米、歎曰、美哉劍也、雖上國之師、何  
能加之、夫劍之成也、吳霸有缺、則亡矣、我雖好之、  
其可愛乎、不受而去、闔閭既寶、莫耶下墓、

○季札劍

欽定拾遺卷十

季札劍 笑中刀 同上

○日の剣

千加万草、口舌の如く、列の尼母の形、活くと、貞色を  
信する、れらゆる、三端、信種考、に、蘇のり、畧らし、し、  
中、後、より、草、羅の、諸、母、を、し、り、し、

○太刀

太刀、記、三、河、新、事、本、向、之、事、也、

太刀、心、也、在、心、也、太刀、也、

○刀 鉞 長短 名異 ○刀の長短 依くその名同

今儀り蓋古班 鉞之類 晋宋以来 謂之御刀 後魏

曰長刀 皆施龍鳳環 至隨謂之儀刀 裝以金銀 羽

儀所執 鄣刀 蓋用鄣身 以御敵 橫刀 佩刀也 兵士

所佩 名亦起於隨 陌刀 長刀也 步兵所持 蓋古之

斬馬鉞

○大 刀 尋常の太刀ハ二尺ト一尺ト四尺トモ有リ

○短 刀 小刀 七首 切刀 腰刀 一尺ハ

佩帶 脇指 小太刀 一尺ト一尺ト 守口 一尺ト

懷鉞 馬手指 一尺ト一尺ト 鐵徹 一尺ト

一尺ト一尺ト 一尺ト一尺ト 是刀の終ハハ守口

大腸指 一尺ト一尺ト 二尺許ト一尺ト七寸トモ有リ

○中 脇指 一尺ト一尺ト 一尺ト一尺ト 二尺許トモ有リ

○小 脇指 一尺ト一尺ト 七寸ト一尺ト 寸許トモ有リ

○合 口 一尺ト一尺ト 小脇指の澤キト懷鉞ト一尺

きく小刀の形ト 醫家澤後禪ハモハ 指持 扱了聖刀

喰出 トモ有リ 是ハ小刀のモトトモ有リ

○刀制

六典 十之九 刀之制有四 一曰儀刀 二曰鄣刀 三曰

橫刀 四曰陌刀 注釋名曰刀末曰鋒 其本曰環

今儀刀蓋古班鉞之類 晋宋以來謂之御刀 後魏

曰長刀 皆施龍鳳環 至隨謂之儀刀 裝以金銀 羽

○鏡

○ 芳冠 四葉 一尺ト一尺ト 是刀の終ハハ守口



此の事多し一然れども古語に或はみたりしを得る事  
考へて可れしらしきことありしは是達人の事なり  
ちんは是れを益す

○二向一尺槍 ○二向餘

○北條大ゆにハてりれは多の槍二向一尺は用ひ  
云々云々但一是は敵一人を射る益ありしは早に  
了りての合戦の故にハてりしは是れ一物に二向は  
ちんは是れを益す

○竹口 竹頭

○續草廬雜考 無定録云中朝人削竹或作口  
形或作篋常并用以通謂之竹頭と云西土ハ是れ  
ちんは是れを益す

○十文字槍

○朝鮮の倭使の書にハてりしは  
はちんは是れを益す

武備年集 武備  
二編 天保九年九月

柳名小字太新 印唐  
格切をてりしはハてりしは  
是れハてりしはハてりしは  
是れハてりしはハてりしは

朝の所書にハてりしはハてりしはハてりしは  
周礼の胡弓にハてりしはハてりしはハてりしは  
周礼 考上記為戦博二寸内倍之胡参之  
四之。鄭玄注曰援直刃胡其子也小支謂胡也  
即今之戟傍曲也 ○後漢書ハ十五呂布傳布彎弓  
顧曰諸君觀布射戟小支中者当各解兵不中可  
留決劍布即一輪正中戟支

○槍制

○六典 兵部 槍之制有四 一曰漆槍 二曰木槍 三曰  
幹槍 四曰樸頭槍。注釋名曰矛冒也刃下冒矜  
也長丈八尺曰稍馬上所執蓋今之槍也漆槍短  
騎兵用之木槍長步兵用之白幹槍羽林所執樸  
頭槍金吾所執也

○棨戟

○西漢書 九百 匈奴傳下 棨戟十。任師古曰棨  
五







と切らぬなり ○ 倭平盛長江 人義のりやの割の去  
キリヨシハハナリト 勅ヨシハハナリト 小古の登後  
元合ヨシハハナリト ○ 同 山木判夜討の条  
夜打ヨシハハナリト 柄古ヨシハハナリト 小古の佛  
是下故馬改義の扱ヨシハハナリト 浪の小経巻の目費  
ヨシハハナリト 義の扱ヨシハハナリト

○ 鋌

○ 又選ヨシハハナリト 西京賦 張平子 飛早備削 流鏑擲擲  
矢不虛舍 鋌不苟躍 ○ 注 薛綜曰 躍跳也 矢鋌跳  
躍必有獲 ○ 李善曰 迄又鋌小戈也 ○ 呂尚曰 鋌  
小房也 躍投也 房箭不虛投 言箭必中

○ 兵

○ 古ハ兵ヨシハハナリト 魯名ヨシハハナリト 許  
の勢ヨシハハナリト 劔ヨシハハナリト 學ヨシハハナリト 軍陳ヨシハハナリト 兵

淮南子 主述訓 兵莫惜於心 而莫邪為下  
冠莫大於陰陽 而袍鼓為小 ○ 注 老子曰 重積德  
則無不討 故以莫邪為下 冠亦兵也

○ 五兵

○ 揚升菴外集 世 周禮 司兵掌五兵 按司馬法 弓  
矢 □ 戈矛守戈戟助 凡五兵 長以衛短 短以救長  
○ 淮南子 注 泥論訓 齊桓公將欲征伐 甲兵不  
足 令有罪者出犀甲一戰 有輕罪者贖以金分 鈔  
而不勝者出一束箭 百姓皆說 乃矯箭為矢 鑄金  
而為刃 以伐不義 而征無道 遂霸天下 ○ 注 凡五  
兵也 刃 劔矛戟矢也

○ りぎりぎ

○ 義經記 伊勢之守 宿の如 我々のりぎりぎ  
みんものりぎりぎ



俗より棒り

手り棒り

○短兵 長兵

○西漢書九十四匈奴傳上其長兵則弓矢短兵則刀劍。注師古曰劍鐵把小矛也音蟬。○

○兵之五兵のものをとらばしるを得しる矢の

○鉞斧

○六典其鉞斧。注石氏星經曰天鉞一星在星宗輿服志曰鉞黃帝所造塗以黃金行載以車可  
以斬戮傳云湯伐昆吾躬把大鉞武王入商國周公把大鉞畢公把小鉞以夾王以鉄焉之。韜云武王軍中有大柯斧刃廣八寸室八寸名爲天鉞  
即今之天鉞也魏晉已來上公親征猶其器

○纏 まひ

○前漢書七十二趙廣漢傳幢綵。注師古曰幢綵也纏有衣之戰其衣以赤黑繒焉之。

○サリガ

韜錄

○サリガのイハ

サリガのイハ

○義經記ニ伊豆之平の戦に於て主の軍にありし者其の故を推測す内に入らざるは年  
の少く廿四五の少く其の故を推測す内に入らざるは年  
少く其の故を推測す内に入らざるは年  
少く其の故を推測す内に入らざるは年

○流星

流星 羅索 格索 格索

今流星のものは鉄演のそ又鉄を以てし是れ故  
人の鉄戦をまひて九枚の目し

○藏經音義卷廿九 結索格索 西國戰具也、一名塔索、逆擲繩繫取敵人頭脚、名爲結索

○棒

○武德編年集成卷七 永祿七甲子年八月十日、  
列王棒の序、  
勝又十八年、  
首に別つる、  
台以論る、  
揚り

○此く、  
今世は是、  
如く、  
鷹也、

○ころま、  
もの、  
とる、  
て、  
ち、  
是、  
や、  
の

○是、  
棒、  
衣、  
而、  
字、  
と、





のもろくはさうきく或のまに鞆くくく持つきつめたる故  
 二竿とくはさくしは子腰カコく腰から好しし持  
 くくくく今たけひの或も花火のたけし青のゆ  
 成りおちるる飾りの三つ大進ゆ検見の舟箭の  
 印の角の秋のしちり義経朝方の竿の杭道中野と  
 雲のうらやうたけのたけのわだつりくくくくくくく  
 くのうらやうたけのたけのわだつりくくくくくくく  
 くれ枝のたけのしちりくくくくくくくくくくく  
 使る行りくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 けのたけのうらやうたけのわだつりくくくくくくく  
 比美濃の土は殿おちるまはるくくくくくくくくく  
 杯付支き昔のたけのしちりくくくくくくくくく  
 の留字の増響ちりくくくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 知くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 けの金襴面指くくくくくくくくくくくくくく

ヤ。又菓子鞆くくくくくくくくくくくくく  
 のわたりくくくくくくくくくくくくくく

○寝巻元 大袖を行動のりまの殿とくくくくくく  
 言方中ねりくくくくくくくくくくくくくくく  
 行成の冠くくくくくくくくくくくくくくく  
 行成のらくくくくくくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 日ち國度秋の多し行成ののりまの合くくくく  
 ○美人草 きのうのうらやうたけのわだつりく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 けのたけのうらやうたけのわだつりくくくく  
 上くくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 鞆のたけのうらやうたけのわだつりくくくく





之執事明又復往取其枕子矣又使人歸之明日  
又復往取其簪子矣又使歸之

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

類聚名物考卷之

○武藝部 十四

刀劍雜事 名物

○太刀置振之事

○東山殿年中行事 正月元日 公家リ次の

きりきり〜公家と〜之職〜

洲前〜公家一人〜

〜比太刀の置振〜

柄の方切り〜

盛長記〜

今の世の〜

解の〜

〜

〜



○太平記 頼負同忠のり 土政十平と今うわさ  
ありしとて是もさしきりあやむとていふる。山本九  
郎が治を身とていふるもさしきりあやむとていふる。太平記  
に云ふもさしきりあやむとていふる。六朝の客殿に云ふ天守（太平記  
に云ふ）とていふる切なり。

○大日持様のり

○薩戒記 釣殿中将入道口傳と曰道信司細  
出仕ニ皆難式令持時繪時大日の難色持右守  
取ハテ出テ持ハハ 難色ハ又時ハ童中向ナトニ持也ハ

○御帳臺ニ大日置式のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

○大日置式 帳臺飾のり 御帳臺のり

国立公文書館  
National Archives of Japan

のりてこてふりてふりては相争の用ひのりては

○ 銀波石日次のみ

○ 南嶺遺稿四ノ銀波石日取のりて古ノりてありて  
中右記の庚申の用ひのりて庚申の用ひのりて  
相直取河のりてのりてのりてのりて  
水氣の合まてのりてのりてのりてのりて  
世下土生金はのりてのりてのりてのりて  
ま取取のりてのりてのりてのりてのりて  
又又壺井先生のりてのりてのりてのりて  
是のりてのりてのりてのりてのりてのりて  
とらてのりてのりてのりてのりてのりて

○ 金銀装束のりてのりてのりて

○ 建武二年に 武者所帯了知修のりて金銀装  
束のりてのりてのりてのりてのりてのりて  
各存儉約のりてのりてのりてのりてのりて  
尾朝同可存止

○ のりてのりてのりてのりて

○ 白氏文集廿六 寄斬刈草与元九持 苗竹  
出斬春霜のりてのりてのりてのりて

○ のりてのりてのりてのりて

二月八日... 二月八日... 二月八日...  
のりてのりてのりてのりてのりてのりて  
のりてのりてのりてのりてのりてのりて  
のりてのりてのりてのりてのりてのりて  
のりてのりてのりてのりてのりてのりて  
のりてのりてのりてのりてのりてのりて  
のりてのりてのりてのりてのりてのりて

陽九の災動するをまじくすべしと云ふは、  
又飛石の家法、二ハの文字、画の<sup>續</sup>、  
切られぬ、  
○ 唐喜志林、古人鑄り、五月丙午、取純火精、以協  
其數

○ 銀のなるをりつり

○ 中山傳信錄 今帰仁府曰、國語、  
有獲銀、漢音北王戰歌、以寶銀、自到不能、  
志慶、真川百年之後、漢至水張、漢光、  
人得之、獻王、今王府第一寶銀也、  
今、  
古、  
夜切、  
是、  
西土、

○ 日銀の飾、草、  
○ 千、  
神、  
一、  
皮、  
を、

○ 大、  
今、  
或、  
行、

○ 中、

今、  
或、  
行、

ひんえのぬすりし

○明徳記 藤原公家所蔵の二つ迄を所蔵の二振飾りやたらとあるにる薬研を付しとる所脚すしとるもの○三つ箱飾り 籠り首のりし腰

○大り二振飾り

のうらぬらしく二振も二振しとる一とる大平記の古物四らぬつ飾り二振しとるしとる田樂所作の甲由をさくち脇をさるせと振るはるも今ましくく江戸王子控現の七月十三日のおれり田樂の古物(のさくち)世話し行い大り二つをさるしとる大り二振のりす差しとるひらとるすしとる今まのり

○大平記の角東大僧上巻

飾りとの紙合のり大り二つしとるしとる○明

○口銀草紙

明記 ありとる○大平記 和田新巻と徳秀と息巻と徳華の巻も大り二つ二振しとる

こののりしすまう通世に鴻尾の飾り後りす

あつ繪画木像等もつららの定りし物なり

昔の海舟のりしすまう古に聖徳太子甲由の古像

とるしとる銀のりしとるしとる後部しとるのりし

とるしとる飾りしとるしとる古馬のりしとるしとる

合もとる考りしとる

○大石寺を夫が曾我物居 現の者次白大石のりしとる

とるしとる三條路の大石のりしとるしとる殿寄のりしとる

飾りありとるしとるすまう大石のりしとるしとる

名物

○草薙乃 草薙乃

ハ股の大蛇の尾中よりハ 秘の  
之の行ふ名あり 後日引或者の行草ハ 薙之  
らるるの行ふ名あり 草薙乃ハ 名存ハ 秘  
草薙乃ハ 乃ハ 後日引或者の行草ハ 薙之

○古事記上其ハ股遠呂智信如言来乃每船盤  
入乙頭飲其酒於是飲醉孔由伏寝尔速須佐之  
男命拔其河御佩之十拳劔切故其蛇者刺割而  
見者在都牟刈之太刀故取其太刀思異物而白  
上於天照太神也是者草薙乃之太刀也○并五  
伴猪矣友加而天降也於是副賜其遠岐斯  
音ハ尺瓊鏡及草那藝劔

○十束劔

○太事記 自伊弉諾道寶劔之至 十束の劔を名存  
十束の劔を名存

十束の劔を名存  
十束の劔を名存  
十束の劔を名存

○十拳劔

○古事記上於是伊弉那岐命拔河御佩之十掬

劔斬其子迦具土神之頭尔著其御刀前之血走  
就湯津石村所成神名石拵神次根拵神云云故  
可斬刀名謂天之尾羽張亦名謂伊都之尾羽張  
云云○於是河邊志貴高日子根神大怒曰汝者  
新愛友故乎未耳何吾比穢孔人云而拔所御佩之

十掬劔切其茂屋以足蹴離遣此者在美濃國藍

見河之上喪山之者也其所切太刀名謂大量

不得一魚遂失悔然其兄陸乞徵故其弟御佩之

十季劔作五百鈎、雖償不取

○天之尾羽張十季劔別名

○伊都之尾羽張日上

○大皇日上

○神度劔日上

○以上古事拾遺上

○此今壺切

○大鏡一今夜の以後見すは東

天皇<sup>高天原</sup>降臨すは、高天原高天原に降臨すは、

同日十月廿三日、同日十月廿三日

壺切より、壺切壺切より、

壺切より、壺切壺切より、

壺切より、壺切壺切より、

壺切より、壺切壺切より、

壺切より、壺切壺切より、

○小鳥丸一書云桓武天皇

遷都於山城國平安城一日

上御紫宸殿拜東方日出、忽有八咫鳥飛入金

殿止玉床傍、上操笏麾之、隨手直進、如奉命者、

首奮翼、口不能言、為嗚呼、声上、即睿聖默通、其音

曰、臣自神風之伊勢、五十鈴度會奉神旨來、以奉

寶劔、ハコト而鳴、今去、翱翔高拳、不知其所之、止

集之處有、神光赫奕、照于四壁、上怪而觀之、即寶

劔也、因目之、号小鳥丸、今案、可也、詳

前太平記卷四、鳥丸、今案、可也、詳

前太平記卷四、鳥丸、今案、可也、詳

前太平記卷四、鳥丸、今案、可也、詳

前太平記卷四、鳥丸、今案、可也、詳

前太平記卷四、鳥丸、今案、可也、詳

前太平記卷四、鳥丸、今案、可也、詳







○ 鯨尾

増境 三條宰相ゆりて盛に召捕き及て今の家  
ゆりて鯨尾とてやま口代をさすゆりて中かひの  
まじりてさすゆりてゆりて自害十才かたゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

○ 川所産の太刀

○ 北條九代に人荒後之をたすつ討て生華の屋  
母衣ゆりて白月毛ゆりてゆりてゆりてゆりて武田  
七代ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
たすつ討てゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
家次ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

○ 鬼丸

○ 太早記 山崎政の条 鬼丸とて今ゆりて右新  
の太刀  
帯ゆりて名詮自註ゆりて道徳ゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
武田七代ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

○ 菊水

○ 同 楠木成吉送故々条 楠木多庫ゆりてゆりてゆりて  
形見ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

○ 藤作

ニツ流 ゆりてゆりて

○ 明徳記

藤作ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて  
ゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりてゆりて

○藥研微 平けしとる

○明徳記の上

○八八王 ちつぱら

○雅太午記 鈴門御守守徳白母後 叔反三のちを  
をりりきとる 伊賀の存人愛尊の真徳の所  
を後らしてその年首のしりき 大りも 持はし  
〜 武康より軍前 後今頃の家人友村年を  
りのお聖尊の知言も 浩〜とら 及下りの御  
行見しと 具の徳り成りて 徳と半取をワ〜  
〜 創せぬ〜 徳りも 今頃の徳の徳り  
〜 の大い〜 重徳の徳りも 八八王  
と名付らぬ〜 徳りも 國吉の徳りも

○永孝坊

○徳井にの記 白南の徳りも 徳りも 徳りも  
年〜 徳りも 右の徳りも 徳りも 徳りも  
〜 永孝坊の徳りも 京極の徳りも 徳りも 徳りも  
徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも

○永古坊 一七岡木

○徳井にの記 京極の徳りも 徳りも 徳りも  
年〜 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
六郡の徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
〜 大徳利面徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
けたりは別大徳利面徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
行面の徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
柳願堂助の徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
〜 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
五人の徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
り岡木前も 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも  
村の徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも 徳りも

△のりの中手も後又後者の家名  
の永古坊とト太アと徳りも 徳りも



これ其神ありて何事なるまゝ中身こそ又なほ上りたり  
時辰入るまゝ人の三辰辰の親類者へまゝ若く物に依りて  
獲言ふまゝつらり一夜寝る事かよ名遣元より行合へり  
可き心ひつらり夜明けに依りてはくらりて道に歩きのり  
又又ありてはなほまゝのまゝ大つ驚くことけし陰方あり  
りてその道のりやんをなりて言ふと根合申す事なり  
はなほ其の道のりやんをなりて言ふと根合申す事なり  
りてその研有るまゝのりて或腰の中しは神をうらまひて大  
す大切ゆつらりまゝのまゝのりて言ふと根合申す事なり  
二人の罪人若くまゝのりて切りと道に歩きのりて切  
あるれりゆつらり大切ゆつらり言ふと根合申す事なり  
宗と認るて是て言ふと根合申す事なり  
中より四人永井肩高と云ふまゝのりて言ふと根合申す事なり

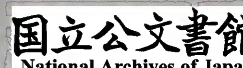
○以手拍

○湯家痛抄之巻 高華凍の行記より名古りて 神傳

山凍河の下と清水のまゝ湯大名おりて及三今及故中  
向け付り並後に今及と六月まゝ清水涌はりて  
行故の里大功を利家の傳へり十二人つらり水及  
ある番の若くまゝのりて及三今及のりて  
論と及りて 神祖に湯抄のりて相とつらり  
睡りたりて湯抄のりて湯抄のりて湯抄のりて  
は鉄炮に古伝の連合伝の場へ行と利家の傳九の裏  
のりて結懸るのりて利家の傳九のりて湯抄のりて  
は利家凍不宣伝の場へ通りて湯抄のりて湯抄のりて  
は利家凍不宣伝の場へ通りて湯抄のりて湯抄のりて  
まゝのりて

互波

湯井之記九 南北和略之卷十二月二日行を島入宗傳  
同所社宗同十四日柳ヶ瀬す見送り互波  
湯井堂への湯大り湯井黒より馬一足ゆい宗傳を



石破いーア

此并に代記上信長は長政討而して空城長政又も  
信長は佐和山の城ありし所を奪取するも信長は直  
代り信長も奪取するも石刻といふより一勝近江綿三曰  
同國の名物布曰是日毛馬一疋を家内の妻に与りて  
いふに近江名所をいふ歌書二冊以上ありし所  
ト云ふるも今も信長はと云ふる信長も奪取の力  
ハ其政秘傳秘蔵と云ふに信長も奪取するも信  
長は奪取するも信長は長政信長の為す國と云ふ  
要相と云ふ後にはいふに

石破いーア

